

多少に由て相別る、而して書籍なるものは、實
然らば即ち吾人に讀書の必要有益なる故て喋

而かき書籍は猶ほ利刃の如し、善く之れを用ゆれば護身として重
寶として、其の利益甚た大なり、若し一朝其の用を過れば、己を傷
け人を害し、遂に不測の禍を成すなり。

今日文運の發達印刷術の進歩は、書籍の發行兩ふるか如く、學生
は廣告を見るの煩にだも堪へず、況んや此等の書籍を一々選擇し
て、詳に之れを會得する方法を講ずるの暇あらんや、是れ今日の



學生の多くか、時間と經費と腦力とを費して、而かも十分に讀書の効果を收むること能はざる所以なり。
讀書法は、這般の學生を指導し讀書の効力を完からしむの方法にして、誠に刻下學界の急需に屬す、是れ余が今日本書を公にする所以、聊か講學の一助とならば幸甚。

明治三十五年二月

駿臺隱士 著

學生讀書法

第一章 讀書

第一節 讀書の利益

(一) 利益の書讀
人は萬物の靈長にして、三才の最靈なりと云へども、教育の如何により、賢愚相分れ敏庸相別る、蓋し教育なるものは、吾人が天賦の智能を發達せしむるものなればなり、若し夫人にして智能の高等なる發達、換言すれば智識なるものなくんば、實に社會上に於て幸福なる地位を占むることを得ざるのみならず、一日も世に處すること能はざるべし、佛國の學者ロシニフターコー曰く、智識の心に於けるは健康の身體に於けるが如しと、人として智識の必要なる多言を要せざるなり、而して書籍なるもの

は、吾人に智識を授與する最良の師友なり、英國の哲學者ベーコン曰く、讀書は圓滿の人を作ると、伊國の詩人ペトラーク嘗て書籍の機能を説いて曰く、余は善良の朋友を有せり、其の中に古人あり、近人あり、内國の人あり、外國の人あり、之れと交る極めて愉快なり、彼等は有名の人物にして各々赫々の偉業を爲したるものなり、余にして其助を藉らんと欲するときは、能く余の請を容れ、又余が意を喜ばしめ、余をして淋しきを感じざらしむ、且つ彼等は曾て余に迷惑をかけたることなきのみならず、常に余の間に答へて余を指導せり、或は語るに古代の事跡を以てし、或は教ふるに宇宙の幽玄を以てす、又は生存の道を教へ、又は死するの道を説く、或は快談を以て心中の憂鬱を除き、或は勇氣を鼓舞し、或は制慾の教を與へ、或は自尊の精神を發揚す、之れを要するに、余の親愛する書物と云へる朋友は、萬般の智識を啓發し、以て余をして機に臨み變に應じて宜しきを得しむと、又た米國の文學者チャニンク曰く、世界何物か書籍の効能に如く者あらんや、書籍は獨を慰め憂を去り、苦痛を解くものな

り、兩大陸の富を併せ集むると、尚ほ書籍の與ふる利益に及ばざること遠しと、丁抹の文學者バルトリン曰く、書籍なかりせば神は黙し正義は眠り、自然科学は進歩を止め、哲學は跛に、文學は聾い、而して萬物は闇黒の中に埋没せらるべしと、又古我國に於ても松平樂翁は嘗て十法を制し讀書是れ智を廣むるの第一法と云ひ、林子平の如きも讀書は萬能の基なりと云へり。

此の如く、古今の諸名士が、異口同音に書籍を稱揚する所以は何ぞ、實に讀書は吾人に幸福を付與する宏大の利益あるが故なり、吾人が今日一室に閉居して、千年の往昔及び千里の異域を知り、又は事物の道理原則を講究することを得るは皆な是れ書籍の恩恵なり。

第二節 讀書の快樂

書籍は吾人を指導し訓育し。圓滿幸福なる生涯を保たしむるものとして、宏大的効益あるのみならず、讀書夫れ自身は直接に吾人に快樂を附與するものなり、此れ世間の事物は時により處により、盛衰あるに拘らず、獨り書籍の必要効益は振古未だ曾て一歩も衰へず、益々盛大なる所以なり。英國の詩人トーマス、フラー曰く汝若し外に在りて遊戯又は事業を有せざれば、退て汝の書齋に在る皮の衣着たる正直なる古き人(書籍)を友とすべし、彼等は汝に供するに優れたる鬱散の術を以てせん、英國の政治家家リチャード、コブデン曰く、余は社會の種々なる状態を目撃せり、職業上又快樂を得ん爲めに、余の心思を興奮せしむる多くの方法を試みたり、而かも余は正直に又良心の許可を得て汝等に告ぐるを得べし、即ち余の曾て知りし最も清き快樂は、汝等何人と雖も之れに接することを得べきものにして、吾人の爐邊に於て書籍を透して

聰明の人と語り過去の偉人と眞交を結ぶことは是なりと、伊太利の文豪ベトラークも亦た曰く、余に友人あり、彼等と共に在るは余に無限の喜樂を感ず、彼等は齡を異にし國を異にす、彼等或は朝に在りて或は戰場に在りて功を立て、且つ彼等の博學の故を以て高く名譽を博したり、吾人は彼等に接し之れに交るは容易なり、そは彼等は常に余の用を爲さんと欲し、余は余の好むが儘に彼等を招きて余の傍に坐せしめ、或は之より彼等を去らしむるを得ればなり、彼等は決して余を煩さずして、直ちに余が彼等に聞かんと欲する質問に對して答ふるなり、彼等の或者は余に語るに過去の出來事を以てし、或者は余に示すに自然の秘密を以てす、或者は余に如何にして生活すべきかを教へ、或者は如何にして死するかを示す、或者は其快談を以て余の煩悶を去り、余の精神を樂ましめ、或者は余の心に忍耐の念を與へ、余に余の慾心を抑ゆる爲めに必要なる教訓を供し、余をして自身以外に願ふ所なからしむ、之れを要するに、彼等は余の前に凡ての學術科學とに達する途を開き、而して余は又凡ての緊急の場合に於

て、彼等の給する報道に安心して頼るを得るなり、凡て是等の奉仕の報酬として、彼等は單に余の弊屋の一隅に於て、彼等が静かに息まさんが爲めに適宜の一室に於て彼等を留め置かんことを余に要求するのみ、又た佛國の文學者フエチロン曰く、若し諸帝國の全版圖の王冠を献げ來りて、以て余の書籍及び讀書癖と交換せんとするものあらば、余は直ちに悉く其の王冠を蹴棄することを躊躇せざるべし、又た英國の歴史家キボンも同様の感を叙して曰く、讀書の嗜みは余の生涯の愉快なり、又た名譽なり、若し全印度の富を以て、之れを易へんことを求むるものあるとも、余は決して肯せざるべしと、這般のものは最も強き意味に於て讀書の快樂を發表したるものと云ふべし。

第三節 讀書の法則

英國の歴史家キボン曰く、吾人をして書を読むに或一定の方法を以てせしめよ、而して吾人が勉學に依りて達せんとする一の目的點を定めしめよ、讀書の用は吾人の思考力を補ふにありと、爾り讀書の用は讀むに非ずして思ふに在り、從て一定の法則を遵據せざるべからざること勿論なり、然るに今日學生が讀書するの状を視るに、徒らに新書を競ひ又は多讀を貪り、殊に規律順序を顧みず、猥りに讀むを以て能事となし、遂に一の得るところなくして、心身を衰弱せしむるものあり、思ふに人の能力は限りあり、不秩序に多くの見聞を貯藏すること能はず、必ずや一定の法則を以て之れを收容するを要するなり、英國の文學者サミュエル、ジョンソン曰く、青年は毎日五時間宛讀書すべし、而して多量の智識を得べしと、此れ時間に於ける制限なり、其他の法に於て、先哲が學理により、又は實驗により、發見せるもの甚しとせざるなり。

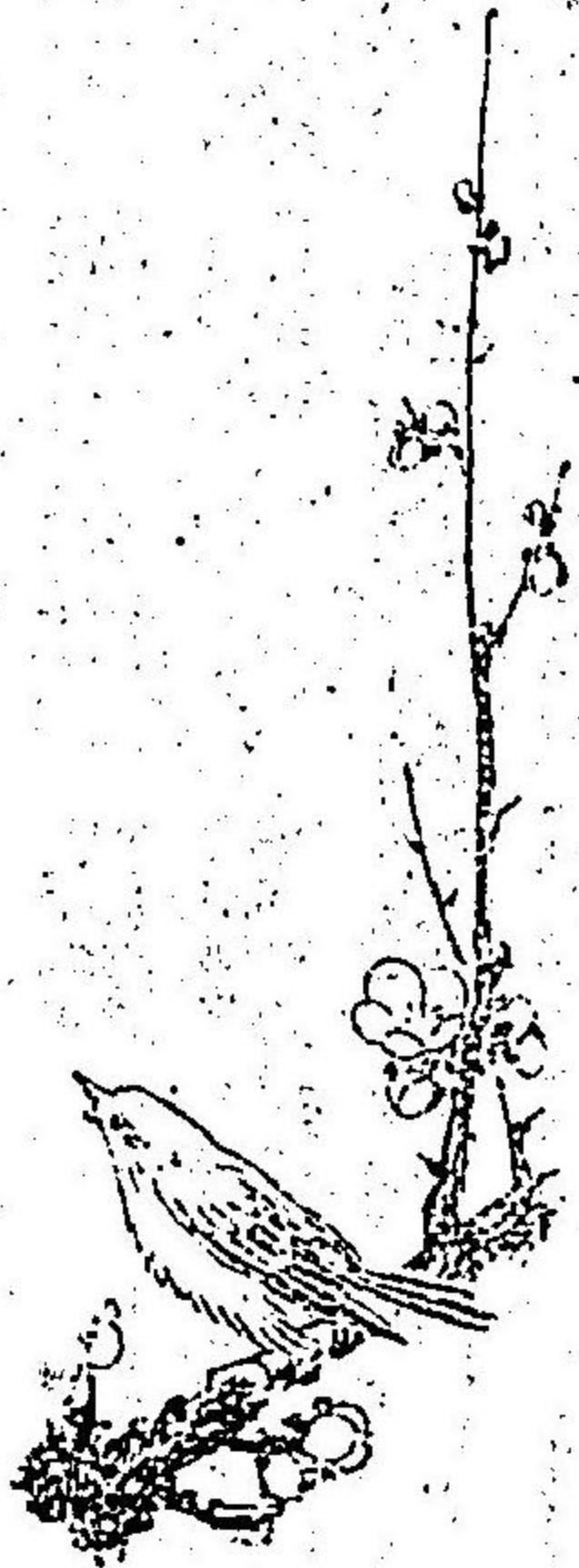
哲學者ヲヨシ、ロツク氏其他大家の説に基き、讀書に付き、法則として心得べき諸件を擧ぐれば左の如し。

- 一 有益なる書籍を選択して専攻すべし。
- 二 著者の言語に拘泥せずして、其の意義を明瞭に解するを力むべし。
- 三 其議論の中正なるや、或は誤謬なきやを吟味すべし。
- 四 讀書能力即ち理解力思考力注意力記憶力を養成すべし。
- 五 疑問は時を遷さず識者に質すべし。
- 六 序跋凡例等は、一般に其書籍の内容及び理由を知るの便あるを以て、先づ精讀するを要す。
- 六 題目論説に適當要用なる思想と、無關係不必要なる思想を明に區別すべし。
- 七 論説の關係輕重を了知し、論據の何れにあるやを明にすべし。
- 八 若し數科の書籍を讀むときは、相連絡せるものに就て其の順序を立つべし。

九 多く讀むよりも能く讀むを力むべし。

十 心思の公平安穩愉快にして、且つ身體の健全なる時に於て讀書すべし。

右は單に一般の用心すべき事項を擧示するに過ぎず、尙ほ詳細なることは次章以下に於て説明すべし、要するに讀書の法則とは、讀書の効力を完ふすることを得る一定の方法を指示するものにして、讀書法の據て生ずる所以なり。



第二章 讀書法

第一節 讀書法の沿革

太古結繩の代に於ては、文字なく從て書籍なかりしを以て、讀書法のなかりしこと勿論なり、下て既に文字の發明せられ、著述の行はれし後に於ても、書籍の數僅少なりし時代は、未だ讀書法の必要今日の如く大ならざりしなり、唯だ希臘に於ては、雄辯家デモスセニスガスシダイアイースの著書を專攻し、反復熟讀遂に八回の謄寫を爲し、全く該書を暗記するに至れりと云ふ、羅馬の政治家セネカは、普ねく古今の著書を涉獵せんよりは、數篇の好著述を熟讀するの優れるにしかずと言ひ、又たクインチリアンは凡ての善き著書は勉勵以て讀まるべきものなり、而して一回終まで讀み畢らば更に始より繰返すべきものなりと言へり、此等の先哲が謄寫復讀暗記選擇等に付て、多少の讀書に關する言行ありしと雖も、元より特別に研究したるものにあらざり

しを以て、今日見るに足るべきものなし。

第十六世紀に至り、英國の哲學者ベーコン公出で、書籍を分て一閱讀過し得るものと、再三熟讀すべきものとの二種となせり、又た歴史、詩文哲學數學等の學科に就きて比較的の價値を論ぜり、猶ほ公は讀書に、關して言を遺せり、曰く辯難攻撃或は輕信假定の爲め、若しくは談話議論の材料を得んが爲めにせずして、熟慮考察の爲めに讀書すべし、讀書は圓滿の人を作り、討議は實用の人を作り著述は正確の人を作る、讀書に従事する時、人其心に定めし問題の何たるに關せず、彼は其の爲めに特別の時間を設くべきなりと、又た公の友人なるホツパス氏曰く若し余にして他人の如く多く書を讀みたらんには、亦た他人の如く同く無學なりしならんと、氏の眞意は良書を精讀專攻し猥りに多讀を貪るべからずと云ふに在り、ベーコン、ホツパスの二氏が讀書の法則に注目せしことを見るべし其の以後に至りては哲學者ジョン、ロツク氏の理會力の教導なる一書中に於て讀書法に關する意見を載せり、氏の門弟アイザック、ニユート

ン氏は始めて讀書法に關する一書を著せり、題して心の開發と云ひ、二部に分てり、
一は智識の修得を論じ、一は教授法を論ぜり、後ち米國のトッド氏學生の導きと題せ
る書を著せしも廣く世に行はれざりき、然るに近時心理學及び教育學の發達進歩に伴
ひ讀書法に關する書籍稍々世に現はるゝに至れり。
支那に於ては古來讀書法に關する論說少からず、朱子曰く讀書の法は、序に循ひて漸
くに進み、熟々讀みて精しく思ふにありと、又た明の濟仲が曹溪日課中、讀書三要に
云へる第一件に曰く課を成すに在りと、其他種々の注意を説きしものありしと云へど
も、總じて心理教育の學發達せざりしを以て、今日探るに足るべきの説鮮し。
之れを要するに讀書法の必要は印刷器發明以後の事に屬し、且つ一般心理學教育學の
進歩に伴ひ學者の注意を惹くに至りしものにして極めて最近の事なりとす。

第二節 讀書法の性質

如何なる書を読むべきや、如何なる時に読むべきや、如何なる方法を以て読むべきや
は、實に今日讀書法の三大問題にして、歐米學者が論究しつゝある所なり、若し夫れ
此問題にして適當なる答案を發見せらるゝに於ては、一般の讀書子を利用すること鮮少
ならざるなり、蓋し讀書法の目的は實益實効を收むるに在り、故に其の法則も亦た學
理原則を主として演繹するよりも、寧ろ先哲の實驗格言等より歸納するを可とす。
古來賢哲の士が、其の學識經驗より發したる金玉の格言固より少からずと云へども、
徒らに之れを排列するのみに於ては、廣漠として其の要領を會得すること能はず、此
に於てか是等先哲の格言を蒐集し、抽象的に實行し得べき普通の規則を發見せざるべ
からず、而して得たる一定の規則を加味して先きの三個の問題を解釋する時に於ては、
茲に讀書法なるものを生ずるなり。

余が屢々述べたるが如く、讀書法は讀書の効力を完からしむるの方法なれば、學生は勿論苟も書籍を繙かんとするものは必ずや、心得べき事柄なりとす、然りと云へども各般の學科に就て、一々之れを説明するは繁冗なるを以て、諸學科に亘り諸書に通じて、一般普通の方法を講究するに止めんと欲す、若し各學科に特有の讀書法に至つては、此に所謂讀書法に基きて適宜發見せらるべし。

要するに讀書法は讀書の實効を收むべき、一般の法則を尋究するものにして、主に左の四個の問案を説明すべきものなり。

- 一、如何なる書を読むべきや
 - 二、如何なる時に読むべきや
 - 三、如何なる場所に於て読むべきや
 - 四、如何なる方法を以て読むべきや
- 右第一問に就ては第四章、第二問第三問に付ては第五章、第四問に付ては第六章に於

て順次詳説せんと欲す。



第三節 讀書法の効益

聞くに法あり、視るに法あり、讀むに亦た法なからんや、殊に今日印刷事業の進歩に伴ひ、著書翻譯の業盛にして、日々の刊行物汗牛充棟も嘗ならず、學生は殆んど讀書の選擇にだも忙殺せられんとす、此時に當り自から講習方法を發見するの暇なきや勿論なり、從て今日學生が勉めて多くの書籍を讀むに拘らず、十分に其の利益を收むること能はず、讀書法は即ち之れを救済する所の唯一の方法なり、若し學生にして能く讀書法を理解し、一定の順序法則を恪守して勉學するに於ては、精神身軀の疲勞少くして書籍の與ふる所の完全の利益を享受することを得るは余が信じて疑はざる所なり。

世或は讀書の法則を知らずして而かも能く讀書の効力を取得するものあり、是に於てか人或は讀書法の必要を疑ふ、然れども這般の者は自然に讀書の法則を會得したるの

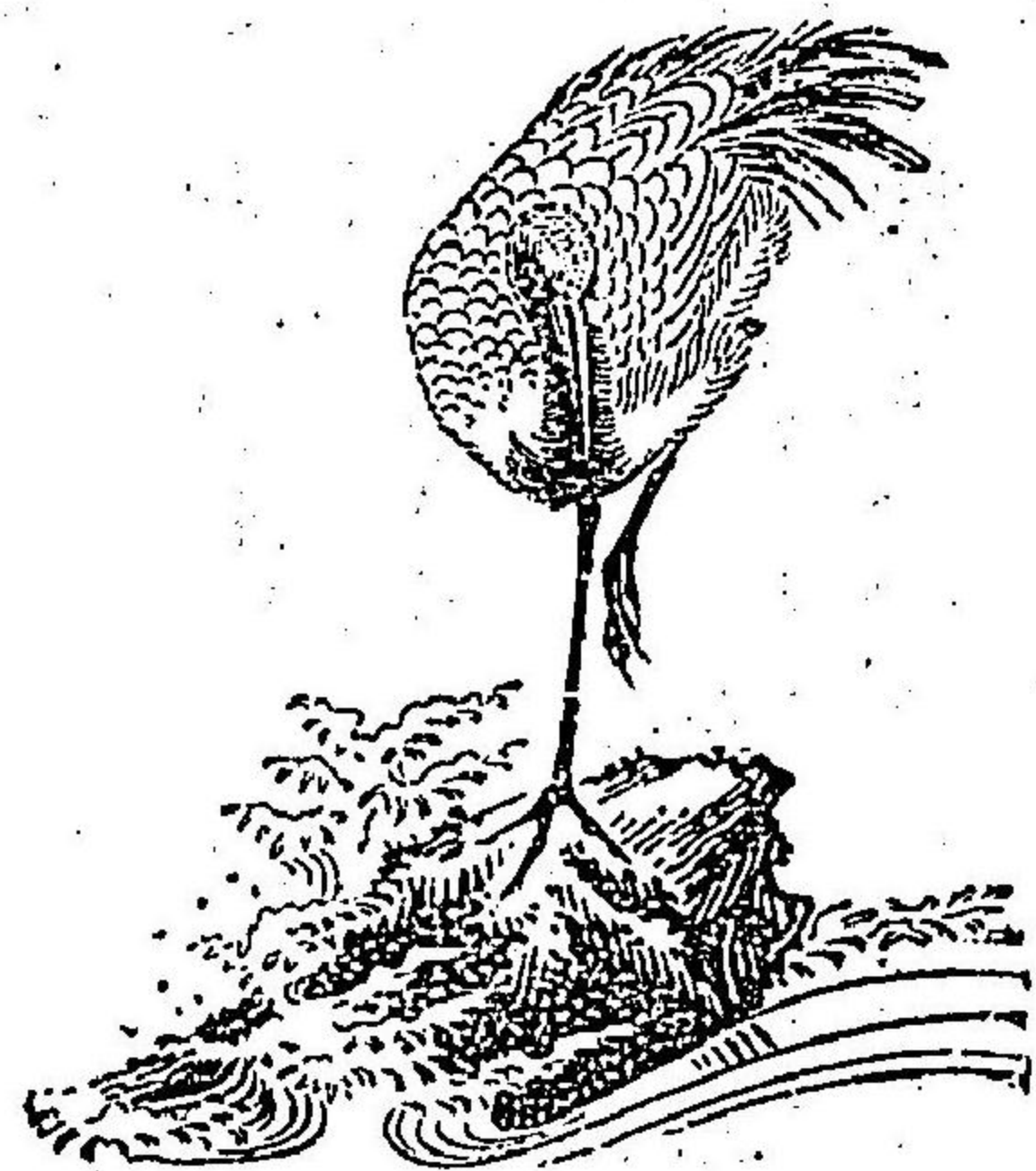
結果にして決して讀書法に背戻して効果を收めたるものにあらざ、既に然れば苟も文字を解し書を讀むの能力を有するものは、必ずや讀書法を講究せざるべからざるなり、何となれば讀書法は書を讀むもの、服膺遵守すべき規則を叙述したるものなればなり。

思ふに書籍は智識の寶藏なり、故に尊重愛讀せざるべからざること勿論なり、然れども此の寶藏を開くの術を知らざれば、内に蟄伏する珠玉も何ぞ瓦石と選ばん、世人書籍の愛玩すべきを知りて、程度を計らず善惡を辨せず、新書を競ひ多讀を貪り、讀書萬卷以て自から得たりとなす、而かも能く其の眞味を解すること能はず、徒らに身軀と精神を勞し、資本と時間を費し、收支相償はず、遂に讀書を廢するの止むを得ざるに至る、之れ讀書の法則を解せざるの罪なり、故に苟も讀書の効果を完からしめんとするには、程度を計り順序を正し、其他讀書の法則を遵守せざるべからず、今日科學の進歩迅速なる時に當りて、素より新著讀まざるべからず、新説聞かざるべからず

と雖も、腦髓の軟弱なる初學生に在りては、徒らに新書を競ふより、寧ろ礎を固むるの急務なるを信ず。
前陳の如く書籍は智識の寶藏なり、而して所謂讀書法なるものは其の寶藏の鍵なり、故に苟も世の書を繙くものは讀書法に通熟せざるべからず、今讀書法の利益中其の主なるものを擧ぐれば左の如し。

- 一 讀書能力を發達せしむ。
- 二 身体を衰弱することなからしむ。
- 三 精神を徒勞することなからしむ。
- 四 時間を空費することなからしむ。
- 五 記憶力を補助す。
- 六 讀書より生ずる諸弊を避けしむ。
- 七 明確の思想を得しむ。

- 八 書籍の選擇を誤ることなからしむ。
- 九 自信力を大ならしむ。
- 十 智識を増進し能力を開發せしむ。



第二章 讀書能力

第一節 理解力

此に所謂理解力とは、書籍の意義を適正に會得し、得るの能力を云ふなり、彼の判断力及び識別力の如きは、理解力と思考力とより生ずる一作用なり、故に苟も讀書する者は必ずや先づ理解力を養成すること肝要なり、然れども此の理解力は一の智能なれば、其の養成は、學修の外に出でず、而かも學修は多く讀書を方便とするものなれば、理解力の養成は恰も理解力の養成に理解力を要すると云ふこととなりて、其の意義を解するに苦しむの觀あり、然れども余の所謂讀書能力としての理解力の養成は單に讀書其もののみを云ふに非ずして主として理解力を練習することを云ふなり、又た讀書の順序として易より難に低より高に進むが如きは、即ち理解力を準備するものに外ならざるなり。

英國の詩人ジョン、ミルトンは曰く、絶へず書を読みながら、之と同等若くは之れに優るの精神と判断とを以て讀まざるものは、未だ尙ほ不定不確の中にある者なり、彼等は書籍の上に於ては該博なるべけれども、自身に於ては淺薄なりと、米國の文學者エマソンも曰く、書籍の興ふる利益は、讀者の識別力如何に依りて異なり、深遠なる思想と感情とは例へば金鑛の如し、同等の思想と感情とを有する人が之れを發見し之れを公にするまでは、永く地中に眠るものなりと、此等先哲の言に徴するも、讀書に理解力の必要なることを知るに足るべし。

蓋し吾人が或書籍を讀みて、其の論説を了知するは、吾人に理解力あるが故なり、如何なる高論卓説も理解力なくして之れを觀るときは、恰も猫に小判の如く、何等の感動を惹起することなきなり、一從て其の書籍の鴻益に浴すること能はざるなり。

理解力の養成法如何、之れ本節に於て主として研究すべき事項に屬す、前述の如く理解力は一の智力作用にして單に書物の内容を讀み得るの力にあらず、書物の内容を讀

み得るの力なり、故に準備たる智識を取得することは理解力の養成なり、即ち難の前に易を讀み高の前に低を讀むが如し、換言すれば素養を爲すに在るなり、例へば世界歴史の前に萬國地理、解剖書の前に生理書を讀むの類是れなり、余嘗て聞く地方の小學教師が刑法を繙き、人に語つて言ふ、吾れ字書を用ゐずして全部を讀了す、一も難解の文字なし、法學生が刑法に苦しむ笑ふに堪へたり云々と、此の小學教師の如きは書物の文字を讀み得るの力あるも、書物の内容を讀み得るの力、即ち理解力なきを以て此の言を爲すに至りたるものにして、誠に憐れむべきなり。之れを要するに、理解力の養成は或書物を讀むの素養を作るにあり、換言すれば、連絡して順序を立て程度を逐ふて讀書するに在り、十分の理解力を有して書籍を讀むときは、興味を喚起し、之れを資料として一見識を樹つることを得べきなり。

第二節 思考力

米國の文學者シオドア、パーカー曰く、汝を益すること最も多き書は汝をして思考せしむること最も多き書なりと、蓋し智識を開發することは吾人の目的なり、而して讀書は其の手段に過ぎず、故にたゞ書を讀むも、直接に目的を達し得たりと爲すに足らざるなり、書籍に書き顯されたる内容を考察して尙ほ之れを研究せざるべからず、文字は素より思想表明の媒介物なるも著者が包藏する處の思想を悉く表明すること能はず、加之一言半句にして言外に無量の意味を含蓄するものあり、故に書を讀むものは先づ思考力を練習せざるべからず、即ち熟讀玩味し、各種の方向より反覆究明して餘蘊なからしむるを要す、換言すれば千思万考して其の眞味を發見することを力めざるべからず。書は讀まるゝ爲めに作りたるものにあらず、思はしむる爲めに作られたるものなり、

英國の神學者ツェレミー、コリヤー曰く、書籍をして吾人の用を爲さしむるものは吾人の思惟なりと、英國の歴史家キボン曰く、讀書の用は吾人の思考力を補ふにありと、英國の詩人バイロンも亦た曰く、言語は實物なり、而して一滴の墨汁も露の如く思想の上に着つる時は、其の結果數千或は數百万の人をして熟考せしむと、以て思考力が如何に讀書に關係あるやを知るべきなり。

書籍は一概に信用し、又は輕卒に讀過すべからず、必ず熟慮するを要す、殊に議論を主とする書籍に付て然り。孟子曰く、悉く書を信せば書なきに若かすと、惟ふに相反對せる議論に於て兩者を信するときは、殆んど無意味の知識を得るに過ぎされはなり、如此場合に於ては兩者の主張を比較し、自己の理解力思考力の力を借りて之れを判斷せざるべからず、又た單純なる一個の意見を讀む場合に在りても、能く之れを腦髓に印象せしむることを要す、此れ讀書に思考力の缺くべからざる所以なり。思考力は忍耐力恒久力持續力等によりて發達するものなり、而して完全なる思考力

は身軀の健全精神の爽快公平廉直の場合に於て作用するものなれば、苟も讀書の人は此等の状態に注意するを要す、故に思考力を増進せんと欲するものは、先づ堅忍公平の思想を養成し、同時に萬般の事物に接して練習することを怠るべからず。思考は疑惑を生ず、此の疑惑は進歩の階段なり、若し夫れ讀書中に疑惑を生ぜば必ずや之れを識者に質すを要す、空々寂々徒らに早讀を貪りて讀了の効果を誇らんとするものは、万巻の書を読むも何の得るところなかるべきなり、嘗て讀書の効なきのみならず、時間を空費し精神を徒勞し、心性の發達を害し智力を萎靡せしめ、又遂に漫讀の悪習慣を養成するに至る、其の害甚だ大なりと云ふべし、要するに思考力は讀書の能力として最も肝要なるものなり、苟も學生たるもの常に之れか發達増進養成に心掛けざるべからざるなり。

第三節 注意力

書籍は充分の注意を以て讀むべしとは、讀書法に於て最も肝要の事に屬す、乃ち讀書するときには他事を顧みず、心志をして全く、書籍に傾注せしむることを要するなり、心こゝにあらざれば見れとも見えず、聞けども聞えず、食へとも其の味を知らずの語あり、讀書も亦た然り、注意力の集注によりて始めて其の効を完ふすることを得べきなり、之れより項を分て注意力の作用及び注意すべき諸件を説明せん。

一、全力を注ぐこと 如何なる簡易の書籍と云へども、十分の注意力を以て讀まざるへからず、獅子は牛羊を殺すにも尙全力を以てすと云へり。

二、時間のこと 讀書せんとするの確實なる心志にあらば、時間は必ず天の與ふるものなり、語に曰く、學ぶに暇なしと云ふ者は暇ありと云へとも學ぶ能はずと、獨逸の哲學者やインテンパツハも曰く、如何なる職業 如何なる事業と云へとも、若

し讀書せんとする 志にあらば、必ずや毎日多少の讀書時間を之れに與ふるものなりと實に然り、平常讀書するの意思あるに於ては、必ずや讀書するの時間を得べきなり、又た爲し得れば毎日讀書の時間を一定し、此の間は必ず讀書するの規則を設くるが如きは良法なり、而して其の時間の如きは一日八時間を超過すへからず、彼のジョンソンの如きは青年は毎日五時間宛の讀書によりて多量の知識を得ると云へり。

三、外界の妨害物を避くべし 注意を一點に集注することは甚だ困難にして、常に外物に誘なはれて耳目の向ふ所を專にし難し、されば讀書の際は、此の注意力の集注を妨ぐべき外界の状態に注意すべし、即ち場所の選擇、書齋の整頓の如き其の主なるものなり。

四、休憩の事 エドワード、ヘル曰く、一時に多く讀むへからず、疲勞を費するときは、直ちに休むべしと、若し精神及び身體の疲勞せるに拘らず、強て讀書するも

何等の効力なかるべし、何となれば書は目を以て観るべきものに非ずして、心を以て讀むべきものなれば、精神及び身体の疲勞せる場合に於ては、心は完全の作用を爲すこと能はず、讀書の諸能力は一の病患に罹り居ると一般すれば、讀書中時々休憩及び疲勞の際に於ける休憩は尤も必要なりとす、然れども、猥りに休憩するときは、能力の作用緩慢となり、悪習慣を發生し、讀書の耐久力を失ひ、却て大害を生ず、故に休憩は適度ならざるへからず、例へば一時間の讀書には十分乃至十五分の休憩を與ふるを可とす。

五、目的の確定 一定の目的を立て、讀書すへし、確乎たる目的なく、漫然讀書するも、其の効益あることなし、故に先づ讀書せんとするに當りては、此の書物により如何なる知識を得んとするものなることを考定すへし、單に何か利益あらんとの薄弱なる思想を以て讀むべからず、殊に今日讀むべき書物數多にして、終日全夜生涯を盡すも、猶ほ時間に不足を感じるの場合に在りて、漫然たる讀書を爲すの餘時あり

らんや、一定の規則の下に讀書するもの、例へば學校教育の如きは幼學の徒にありては、必要の事なるも、高等なる専門の學術に至りては、隨意自修せしむるを以て其の効力甚だ優れりとす、此れ其の講學の目的確實明瞭なるか故なり、讀書の人宜しく目的の確定に注意すへきなり。

六、意義の明解 詩歌美文の如く詞藻と本旨と併行すへきもの、外一般の書籍に在りては、字句の末に拘泥することなく、著者の真意のあるところを解得するを主とすへし、朱子曰く讀書は先づ上下文意の如何を看、一字に抱泥すへからずと、又た西語の所謂著書及び著者を知るとは是れ此れを云ふなり。

七、趣味の喚起 語に曰く好きは上手と讀書して利益を得んとするには、先づ讀書によりて趣味を喚起するを必要とす、而して自己の學はんと欲する所の事項を記述せる書籍は即ち趣味を感じることに最も多きものなり、又た自己の業務と直接間接の關係ある書籍を閱讀するも趣味を感じることに大なるものなり、要するに趣味を喚起す

るは、書籍の内容を記性に把住する所以にして、讀書子の最も注意すべき事項なれば、自己の嗜好と自己の業務との關係を標準として讀書を選択すること肝要なり。

八、一書の熟讀 英國の宗教家リッチャードベクスター曰く、人を善且つ智くなすものは多くの書を讀むことにあらずして、僅かの書を善く讀む事なりと、又ラ拉丁の語に曰く、一書の人を恐れよと總して古今賢哲の士か讀書の状を見るに、一書の熟讀者に於て、最も大なる功を奏したる人あるを知るなり、彼の屢々書籍を變更するか如きは、思想混亂し、一定の見識を立つること能はざるに至るものなり、故に一書を精讀するは讀書の効益を收むるに最も有利なる方法なりとす。

九、順序排列の一定 凡て雜讀亂讀は思想を雜駁にし、注意力を散亂するの恐あり、元より一冊の書物を讀むに當りては、別に順序排列を爲すの必要なしと云へども、講學上數書を比較閱讀し又は順次數書を讀む場合あり、此等の場合に於ては、其の

順序排列に着目し、緩急輕重 難易によりて適當に分類するを必要とす、之れ常に明晰なる義理を得る爲めに便利なるのみならず、記憶を助ること甚大なるものなり、例へば法律を研究するに當りては先づ公法と私法とを分ち而して其公法中に於ては憲法行政法國際法、私法中にありては民法商法と順序に閱讀するか如し、異種の書物を混讀し、又は連絡觀念を去りて順次を定むる時は、讀書能力の作用を妨ぐることも大なり、宜しく注意すべし。

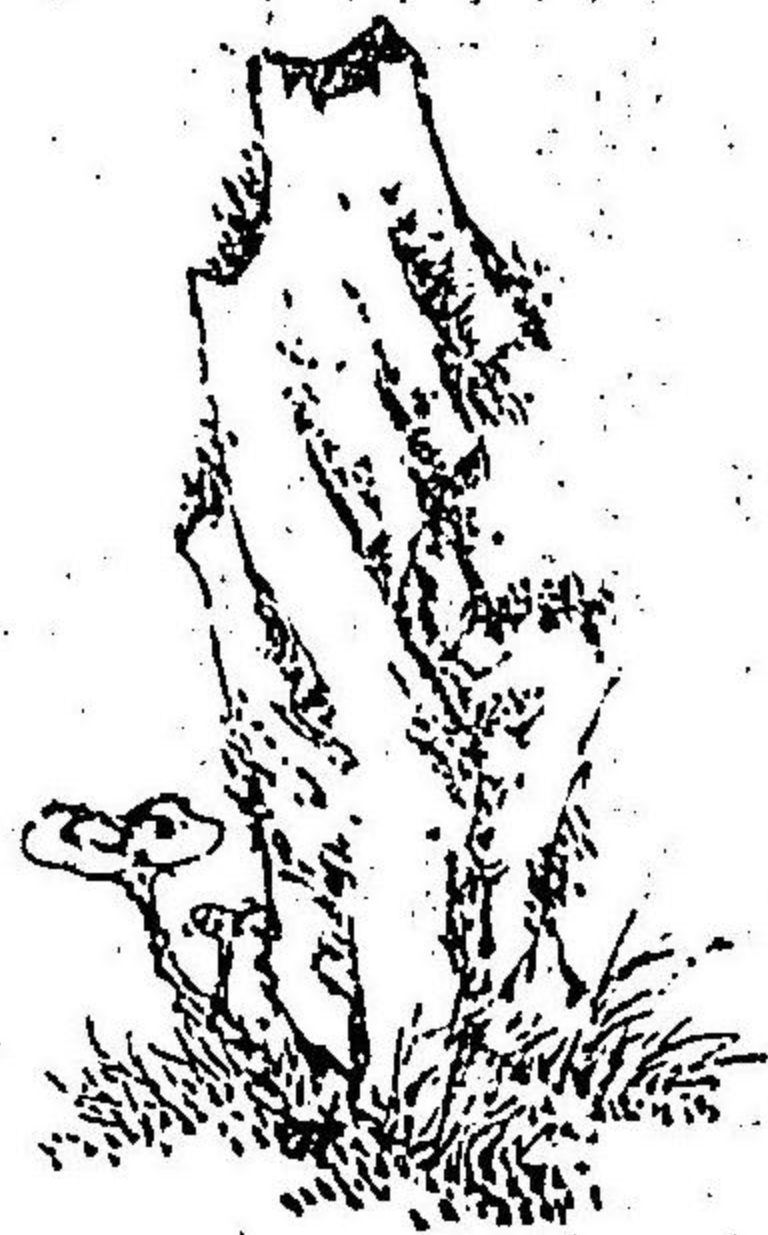
十、衣食住 語に曰く衣食足て禮節を知ると、讀書するものも亦た衣食住の満足なることを要す、而して衣食住の満足とは美衣佳味に飽き高樓に住するを言ふにあらす、余か所謂衣食住の満足とは、讀書中に衣食住を思ふ勿れと云ふに在り、詳言すれば修學中の青年は衣食住の過分なる慾望を斷つべしと云ふに在り、這般の慾望に心を傾くるときは、到底心志を一にして讀書に従事し、完全なる鴻益を獲得すること能はざるなり、故に學生は第一に自から決して衣食住に安心せざるへからず、衣

食住の煩累に心を勞せさるること力めさるへからず、而る後心思を平穩にして一意讀書に従事することを得へきなり、其他酒色奢侈を慎むへきことの如きは、言はずして明なりとす。

右は注意力の作用及び讀書子の注意すべき數件を列記するに止まる、世或は著者の身上を知ることをして讀書の注意すべき事項に加ふるものあり、然れとも余は此の必要を認めず、何となれば著者の内容は著者を離れて存在するものにして、著者の意志の在る所は著書其ものによりて推知することを得へきなり、而して此の條件の如きは、徒らに著書の看板廣告序文及び著者の肩書等を迷信するの結果意思の公平を失ひ、讀書の眞面目の効果を收むること能はさるなり、但し倫理道德に關する著書の如きは著者の履歴素行は大に讀者の信仰觀念に影響するものなれば、多少身上を知るの必要ありとす、其他の書籍に在りては、自己の思想確實公明なるに於ては著者の身上の如きは重きを置くに足らざるなり、要するに注意力なるものは、讀書能力中最も肝要の

ものにして、書を繙くものは、一日も之れを忘却する能はさるものなり。

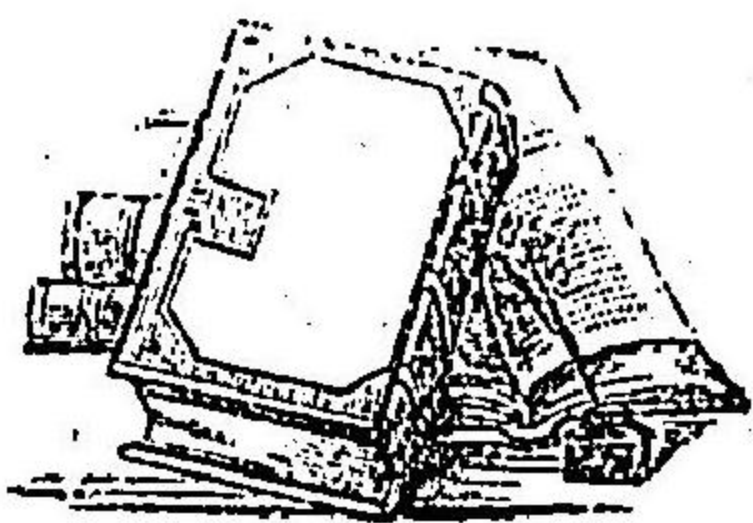
一これキレ



第四節 記憶力

記憶力とは、過去の認識を心内に把住するの智力作用なり、讀書の能力として記憶力の必要なること論ぜずして明なり、記憶は脳髓に印象深き時は、永く保存することを得るものなれば、讀書に當りては種々の方法を以て脳髓の印象を深ふことを力むべきなり、前三節に於て述へし諸般の讀書能力の如きは、記憶力に關係すること甚大なるものなれば、讀者は本章の説明を吟味して以て脳髓印象を深ふする所以の理由を考察せらるべし、例へは理解力思考力の如きは過去の認識に本て初めて圓滿の作用を爲すことを得るものなれば、苟も記憶力なくんば、理解力思考力を生ずることなきなり、注意力の如きも多く過去の經驗及び見聞の記憶により完ふすることを得るものなれば、記憶力は讀書能力中最も須要の位置にあるものなり、前節に陳べし興味喚起の如きは、脳髓印象を深ふする一の有様にして、記憶の方便として必要なるものなり。

ものなり。
右の如く、記憶力は讀書能力の主要なるものなれば、讀書法の大部分は此の記憶力を補助する理法によりて組織せられたるものなり、故に讀者は次章以下の説明に於て毎に記憶力を加味して研究せられんことを望むなり、又た記憶力の養成法其他仔細の説明に至ては、拙著最近記憶法を参照せらるべし。



第四章 書籍の選擇

第一節 選擇の必要

アイザック、ニユートン曰く、良書を選択し十分之れを了解して一點の疑なきに至るは讀書の要訣なりと、今日印刷事業の日を追ひて盛大に赴き、古書の翻刻新著の出版は日に多きを加へ、學生は殆んど其の廣告を見るだに遑あらず、同一學科の出版物と云へども少きは十種多きは百種に上る、此時に當り良書を選択するは甚だ困難なると同時に尤も必要の事に屬す。

抑も書籍は一の勢力にして、良書は吾人を益すること甚だ大なると同時に、悪書は吾人を害すること最も大なるものなり、英國の宗教家ロバート、サウス曰く、有害の書を公にせし人は、言はば彼の墓に降りて尙ほ罪惡を犯しつゝある者なり、彼れは彼れ自身腐蝕しつゝある間に、尙も世人を腐敗しつゝあるなりと、英國の小説家ヘンリー、

フィールディング曰く、吾人か書籍の爲めに腐敗せらるゝは、友人の爲めに腐敗せらるるか如く易しと、書籍の害も亦た恐るべきなり、米國の哲學者ブロンソン、アルコツト曰く、好き書は好き友の如し、數少くして選擇を要するものなり、其の選擇愈々嚴にして其の親交愈々深しと、書籍の選擇の必要なる以て知るべきなり。

凡そ讀書の弊は、其の良否を顧みず、手に觸るゝに隨て濫讀するより大なるはなし、即ち理解力思考力及び注意力を混亂し、記憶力を徒費し一も得る所なきに終るへし、此の濫讀の弊を救ふて、思想の散漫を防ぎ冗勞の時間を執りて有益に利用せんとするには、まづ書籍に就きて綿密に其の良否利害を甄別し、無益有害の書を去りて有益良書の書を選ばざるへからざるなり。

書籍の選擇即ち專讀の書籍を一定することは、明晰正確なる智識を得る所以なり、今日學生の狀態を見るに、讀書の多く且廣きを貪り徒らに記性を冗勞して顧みず、書籍の數を以て誇らんとす、而かも嚴正着實なる知識を發達せしむること能はずして、雜

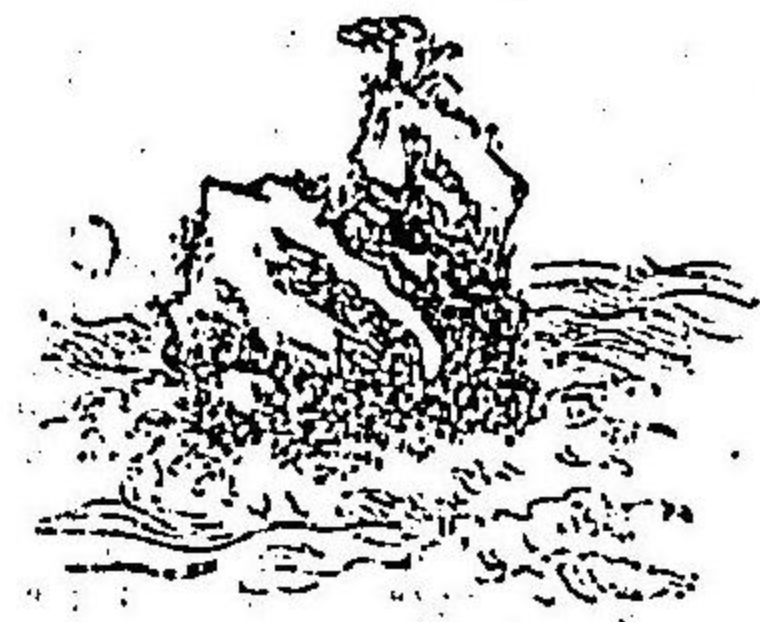
駁なる思想を養成し、一般に生嚼りして博學を氣取るもの多し、故に一朝其の意見を吐露せしむる時は、支離滅裂して殆んど捕捉すること能はざるなり、這般の者は終生講學の目的を達する能はずして、單純なる圖書目錄となるに過ぎざるなり、而かも生兵法にして屢々大怪俄を招くに至る、之れ實に一書を選択して專讀せざるの致す所なり。

專讀書を選択するの必要なるは、上述の如しと云へとも、此れ一書を固守すへの謂にあらざ、今日吾人か研修すべき學科多き時に當りて、單に一個の書籍を讀む、其の知識や狭少にして到底活用に適せず、故に數書を讀むことは元より妨なきなり、否な管に妨なきのみならず、最も必要の事なりとす、然れとも、能く其の順序を正し書籍を選択し、以て時間を無用の書籍の爲めに徒費することを避けざるへからず、科を異にする書物の如きは元より之れを讀むの必要あり、又た同一の書物と云へども著者を異にするに従ひ、多少其の意見を異にするものなれば、日進月歩の今日新刊書

を閲讀するは時世に後れざる所以なれば、之れ又た出づるに従て閲讀するの必要あり、唯た書籍の出版は無限にして、吾人の能力と時間とは限りあるを以て書物を選択すること最も肝要なり、總して同種類の書籍を多く讀むは其の内容同一なるも、文章を異にするを以て倦厭することなく、同一の事柄を異なる語にて吾人の脳髓に印象せしめ、記性を補助するの手段に過ぎざるものなれば、同一内容の書籍にありては、凡ての書籍を悉く讀み盡すよりも、其の二分の一の時間を以て一書を繰返し精讀するの勝れるに若かさるなり、唯た新發の議論に於ては、其書特有のものとして元より閲讀するの價ありとす、余か屢々政府所定の競争試験に應したる人士に付て之れを見るに、徒らに書籍を貪りて廣く且つ多く讀みたる者よりも、少部の書籍を選択し精讀專修したる者に於て其の成績の優秀なるを感せり。

之れを要するに、書を讀まんとするものは、專讀書を選定し精讀すること最も必要なり、但し一書にのみ拘泥するときは、誤謬に陥り偏見に流れ、文運の發達進歩に後る

ることあるを免れず、故に一書を精讀し終らば他の良書を選びて參讀し、以て前書に
より得たる知識を研磨校覈するを要す、從て書籍を選択すると同時に其の聯絡系
統を考慮して順序を立て、以て課程を作るべきなり。



第二節 選擇の標準

書籍の選擇の必要に次て當然起るべき問題は選擇の標準なり、之れ甚だ困難なる問
題なり、何となれば、讀者各々其の好む所を異にし、其の知る所を異にし、其の目的
を異にす、固より良書なるものは客觀的に存在すと云へとも、主觀的に投合するもの
ならざるへからず、換言すれば書物夫れ自身に價値あると同時に、讀者の意に好當し
たるものならざるへからず、故に各個人の特有の希望思想に本くものに付ては、今直
ちに此に一定の標準を説明すること難し、故に一般讀書子に通すべき標準に付て
左に項を分ち余の信ずる所を述べんと欲するなり。

一、趣味を有すること 趣味を有する書とは、能く理解して愉快を感じるの書を云ふ
なり、シエキスピーアー曰く、愉快のあらざる所利益生せず、只汝の最も感動せるも
のを擇ぶべきのみと、而して一般に趣味を有する書籍は、自己の學はんと欲する事

項を記述せる書籍、及び自己の業務と直接間接の關係ある書籍なりとす、凡そ書籍は讀むにあらすして思を主とす故に思考力を用ゆるは書物に趣味あるの場合なりとす、米國の神學者シオドア、バーカー曰く汝を益すること最も多き書は汝を思考せしむること最も多き書なりと、然れども書籍は常に初めより愉快即ち趣味を感じるものにあらず、其の全体的趣旨によりて一個の興味を形つくるもの多し、故に書籍の初めに趣味なしとて直ちに之れを棄つへからざるなり、今日の學生は多く、書籍の眞味を發見するに達せずして之れを中廢し、以て其の價値を評定するものあり、此れ實に誤れりと云ふべし。

二、價値を有すること 價値を有する書籍即ち有益の書籍を選ふべきことは勿論なり、フルターク曰く、吾人の食物を欲するの念を以て書籍を思はざるへからず、即ち最も味好きものを得んとせずして最も滋養多きものを要すべきなり、二者孰れも禁すべきものに非ざるも、吾人の寧ろ要すべきものは後者にありと、英國の文學者

ジョン、ラスキン曰く、人生はいと短く、其の靜なる時は僅少なり、然れば吾人は之れを價値なき書を読むために空費すへからずと、又曰く、全体より言へば汝が汝の讀書を詩歌、歴史、博物の諸書に止め、小説並に戯曲の類を避けるならば、之れに依りて汝の心は愈々健全なるに至らんと。

三、編述の体裁整然たること 人の思想智識は、常に整然として一定の順序及び系統によりて組織せられざるへからず、從て其の培養の根本を爲す書籍の体裁も整然たることを要するなり。

四、説明繁簡其の中を得たること 繁に過ぐれば記憶し難く、簡に失すれば理會し難し、故に中庸を得、而かも其の主要の點を網羅しあるものたるべし。

五、學術の進歩に並馳し居ること、徒らに新説を唱導するの書は、悉く良書にあらずと云へども、日進月歩の今日學術の進歩に伴ふべき書ならざるへからず。

六、讀者の知識の程度に適應したること 讀者の知識程度に適應せざる書籍は、如何

に高妙なる玄理を包有するも、徒らに脳髓を勞せしむるのみにして、何等の得る所なかるべきなり、思ふに讀者の知識に適應せざる書籍は讀者を感動すること能はず、然らば即ち此の書籍は其の程度相應外の人にとりては良書の効用を全ふすることなし、佛國の著術家ブルエヤ曰く、書籍若し汝の精神を鼓舞し、貴き且つ勇ましき感情を以て汝を勵さば、汝此事を判断するに他の標準を求むる勿れ、是れ善き書にして善き著者の手に成りしものなりと、智識の程度に適應するにより始めて此の書を得べきなり。

以上は實に良書選擇の一般の標準を指示したるものなり、今日の學生稍もすれば、著者の名聲の如何を以て選擇の標準に加ふるものあり、之れ或種の書物に就ては強ちに排斥すべき事にあらざるも、時に大なる失敗に陥ることあり、故に書籍の選擇に於て著者の名聲の如きは毫も重きを置くに足らず、主として前掲數標の標準に據るときは大過なきを信するなり。

第三節 選擇の法則

書籍の選擇は、讀書子に取りて、極めて重大の事に屬するを以て、慎重の注意を要すべきなり、今日の學生往々眞正の採擇を誤り、之れか爲めに其の精神と時間とを徒費して格別益する所なきものあり、之れ實に選擇の標準並に法則を辨せざるの罪なり、選擇の標準に付ては前節に之れを述べたり、此に其の法則を説かんと欲す。

選擇の法則とは書籍の外面によりて書籍を選擇するの標準を云ふなり、余か前節に述べしものは主として書籍の内容に付て選擇の標準を示したるものなるも、此に述ふるものは其の外形の事情に付て選擇の標準を説かんとするものにして、余は前陳の如く内容に關するものを標準と云ひ、外形の事情に關するものを法則と云ふなり、之れ元より余か便宜上二者を區別する爲め、名けたるに過ぎざるなり。

英國の政治家ジョン、ラボク其友ダーヴィンに書籍の選擇を問ひたりしに、其最も好

む所を選むべしと答へたりしと云ふ。惟ふに書籍は吾人の信仰を形つくるものなれば、其の好む處に従ふべきは。勿論なるへし、然れども此れ高等なる専攻書に付て云ふべき事にして、學校に於ける一定の課程の場合に於ては、學生たるもの此の如き我儘を云ふの餘地あらざるなり。米國の碩儒エマソン氏選擇の三則に曰く。

- 一、世に行はれて未だ一年を経ざる書は讀むべからず。
 - 二、有益ならざる書籍は讀むべからず。
 - 三、己れの好む所にあらざる書籍は讀むべからず。
- 右第一及び第二は世論公評によりて選擇するの趣旨にして、第三は自己の所信に従はしむる所以なり、即ち主觀的客觀的によりて選擇を決せしむるの方法なり、此れ元より完全の法則にあらざるも、讀書子の參考に資すべき値あるなり。
- 次に選擇の法則に資すべき、二三の事柄に付て述へんに
- 一、著者に着眼すること 或特別の書籍を除くの外、著者の身上如何は重きを置くの

必要なことは、余か前章第三節の末段に述へし所なり、然れども是れ其の著者の名聲肩書等に付て言ひしに過ぎずして、其の能力に付ては元より之れを知るの必要あり、而して能力なるものは其の著書を見て之れを判斷するを得るものなるも、又た見聞及び世評によりて之れを知るも可なり、何れにしても著者の能力は、多くの場合に於て選擇の參考となるべきものなり、英國の詩人ランドール曰く、智者の書きしものは吾人の子孫が決して空費し得ざる唯一の富なりと、米國の宗教家チャニンクも曰く、心の正しき意志の強固なる人、即ち眞の思想家の著はしたる好著作を選ふべし、彼等徒らに他人の言に修飾を加へて之を反覆することを爲さずして、自身言はんと欲する所を語り、以て赤誠溢るゝ計りの人に安慰を供す、然れば此種の著述は快樂を得んか爲めに走讀すべきものに非ずして、確乎たる注意と眞理を敬愛する心とを以て讀むべきものなりと、以て著者に於ても亦た注意すべきものなることを知るべし。

二、先覺者に指導を乞ふこと 書籍の選擇に際して既に其の學科上に於ける先覺者に指導を乞ふは最も便宜なる方法なり、先覺者にして若し正直確實公平親切に指導を與へらるゝに於ては、學生は時間を勞することなくして、良書を選定する事を得、其の利益甚大なりとす、而して輿論に觀て選擇することに至ては、先きにエマールソン氏の三則中に之れを述べたり。

三、新書と古書に就て 新書と古書は何れか良しきやに就ては一般に新書を以て優れりとす、何となれば新書は古書に依りて生るゝものにして而かも舊に古書の精神を繼承するのみならず、著者の新意見を交ゆるを以て讀者の利益甚大なり、加之著者は常に自己の責任に於て能力の競争中にあるを以て、常に良書の發行に勉む故に新書は古書に比して多く優等なり、殊に科學の學說に至ては日に新まり月に變し發明進歩著しきを以て一層新書に據るの利益なるを感するなり、又新書は主に科學的方法順序によりて論述するか故に、頗る講修に便宜あり、要するに新書は

右等の事情によりて、一應古書に優るの推測を下さるゝものなれば、沿革的に研究するを必要とするの學科、又は専門に或學科を研究する等の場合の外、新書を選んて講修するを可とす。

右三個のものは書籍の選擇に際して心得へき事柄なりとす、次に通常學生の避くべき書籍を例舉すれば左の如し。

- 一、議論的に走るもの。
- 二、立論奇矯に過ぐるもの。
- 三、論旨不明なるもの。
- 四、空想に流るゝもの。
- 五、卑猥の感情を誘引するもの。
- 六、感情の極端に訴へしもの。

第五章 讀書の時と場所

第一節 心身の状態

讀書は心力を集中して熱心從事することによりて、完全なる効益を收むることを得るものなれば、心身の状態に關係すること甚だ大なり、若し夫れ終日終夜手に卷を放たざる道、百千卷讀み續けに讀むも、心身の状態に顧慮せざる時は、讀書能力の作用敏活ならざるを以て、到底書籍の内容を腦髓に把住すること能はざるなり、此に於てか如何なる時に於て讀書すへきやは、讀書法の重要な問題となるなり、余は先づ心身の状態より順次説明せんとす。

第一 精神の爽快なるとき

讀書は精神上的の慾望なり、故に讀書せんとするの意志起りて且つ精神の快潤清爽なる時に於て爲さるへからず、精神爽快ならず心神憂鬱なる時、如何に精力を盡す

も決して其の効なく却て腦髓を錯亂するに至るものなり、此の如き場合に於ては、斷然讀書を止め、或は友人を訪問して快談し、或は郊外に散策して、以て精神の快潤清爽に回るを計るへきなり。

第二 心慮の安靜なるとき

讀書は書籍の内容を明解し、其の理義に精通するを要するものなれば、腦髓をして靜思熟考するの餘地を與へざるへからず、而して腦髓が十分に靜思熟考することを得るは、心慮の安靜なる時に在るなり、若し夫れ情緒奮興し喜怒哀樂の情熾なるときは、平正の判断を下す能はず、周密の理會を爲す能はず、愛憎に僻し偏頗に流れ、到底書籍の眞味を會得すること能はざるなり、要するに讀書は精神平靜にして思慮紊れず、俗事肺腑に蟠らざる時に爲すへきものとす。

第三 身体の健全なるとき

心身の關係は甚だ親密にして、身体健全なるときは精神も亦た從ひて健全なり、之

に反して身軀不健全にして苦痛ある時は、精神も亦た不愉快にして清爽ならず、諺に所謂健康の精神は健康の身軀に宿るとは是れ之れを云ふなり、故に苟も精神の作用をして活潑ならしめんとするには、先づ身軀の健康を謀らざるへからず、然り而して身軀の健康は衛生法を遵守することによりて得らるべきものなり、衛生法に付ては此に之れを詳説するの暇なしと云へども、特に學生に付て一二の言ふべきものあり。

- 一、暴食すること 學生の凡ては元より暴食するものにあらず、然れども余か今日一般學生の状態を見るに美味を少食するよりも粗食に飽かんとするの弊あり、之れ實に身軀の健康を傷ふ所以なり、殊に暴食は心身を疲勞せしむるを以て、徒らに睡眠を誘引し、讀書の時間を減殺す、宜しく注意すへし、又た酒色の慎むべきは言はずして明なり。
- 二、規律なきこと 一定の規律は心身の慣習を爲さしむる所以にして、身軀健全法

中肝要の事に屬す、然るに學生の多くは日常の三餐に於ても一定の時間を遵守せざるものあり、起居動作不規律にして身心を我儘に持するを以て、自然懶惰の慣習を作るに至る、宜しく一定の規律時間を格守し、心身を秩序的に馴養すへし。

三、運動不足すること 適度の運動は、身軀を強健ならしむるに於て重要缺くへからざるものなり、然るに今日都下の學生を見るに、終日下宿屋の一室に閉居し、専ら讀書を事とし學校の往復の外一定の運動を爲さざるもの多し、此れ其の身軀を衰弱ならしむる所以なり、偶に散步を試みるも、黃塵萬丈車馬絡繹の市街を彷徨するに過ぎずして、心身の健全に資すること甚だ少なし、殊に彼等は運動を以て時間を空費するものとなし、競ふて居を學校の近くに卜す、而して自から身軀の衰弱するを知らざるなり、否な多少之れを知るも尙ほ讀書時間の多きを以て満足するなり、何ぞ知らん身軀の衰弱は精神の衰弱を來し、精神の衰弱は即ち讀書能力を衰弱せしむるものなるを、嗚呼學生たるもの宜しく適度の運動を爲して

身体の健全を謀るべきなり。

之れを要するに身体不健全にして苦痛に悩める時、或は精神不活潑にして憂鬱ある時は任意の慰藉的書籍を手にするの外、研究的の書籍を読むも何等の効果を博すること能はざるなり、故に少時間と云へとも身体精神の強健爽快なるときは、讀書して著しく利益あることを知るべし。

左れば苟も讀書の効果を以て廣大ならしめんと欲するものは、常に身体の衛生に注意し、精神を快潤清爽ならしむることを力めざるべからざるなり。



第二節 晝夜及季節

前節に述べし關係及び諸般の事情により、晝夜及び季節に於て、讀書に適したる時を説明するは無用の事にあらざるべし。

第一 晝夜に就て

凡そ讀書は吾人か知識を開發する上に於て、普通の状態なれば、從て自然に反することを得ず、故に讀書は夜間よりも晝間を以て適せりと爲さるべからず、蓋し大間は晝間は身心を使用し夜間は安息すべきものなればなり、世或は外界の喧擾注意力の散亂を避ける爲め、夜間特に深夜の讀書を以て晝間の讀書に優るとなすものありと云へとも、是れ元より變則にして摸倣すべきことにあらざるなり。

次に日中に於ては何れの時間を以て讀書に適したる時となすやに就ては一般に拂曉より朝食時に至る間即ち早朝を以て最良の時と爲すもの如し、概するに早朝

は身心共に活潑爽快にして、心慮亦た安靜なるか故なり、英國の政治家ベッドフォード公曰くかの黄金の朝の時間を借りて之れを汝の書籍の上に消費せよと、聞く故中村敬宇先生は味爽必ず三時に床を出て、燭に凭りて讀書せられたりと、以て朝の時間の如何に讀書に適したるやを知るべきなり。

之を要するに、早朝より午時に至る迄は最も讀書に適したる時にして、午後は多く簡易の讀書又は手足の運動に適す、而して暮刻に近くに從ひ心身漸く疲勞す、進んで夜間に至れば休息するを可なりとす、前述せしか如く夜間の讀書は自然に反するものにして、而かも晝間心身を休息せしむるものなれば、一朝正則なる課業に就く時に當りて、其の習慣を打破すること難きのみならず、多く懶惰に陥り易きものなれば、適當の場所と時間とを有するものは、晝夜を正則に使用すべきなり。若し夫れ徹夜して燈火の下に苦誦するか如きは、身體精神を衰弱せしめ讀書能力を萎靡せしむるものにして、讀書法の最も忌む所なり。

第二 季節に就て

一年中に就て讀書に適良の時を求むれば、冬季を以て第一となすへし、蓋し冬季は心神の嚴正なるのみならず、外遊の心起らざるを以て閉居して注意力を集中するに適す、夏季は之れに反して心神の困憊を來し書卷を執るに懶し、春季は駘蕩の時にして懈怠し易く、秋季は四面靜穩にして讀書に適す、要するに四季中に在りては冬季を以て第一とし、秋季を以て第二とし、春之れに次ぎ夏は以て最も不適當の時とす、故に學生たるものは宜しく之等時季の適否を鑑み、讀書科程を立て以て時間を配合すべきなり。

第三節 場所の選定

讀書の効益を完全に得んとするには、注意力を集注することを要することは余か屢々述へし所なり、而して此の注意力の集注を妨ぐる原因二あり曰く内に關するもの即ち内因外に關する即ち外因之れなり、其の内因と稱するは心神の狀態に關するものにして余か前節に述へし所なり、其の外因と稱するは場所の有様に關するものにして余か本節に於て述へんと欲する所のもの是れなり。

讀書は注意力を集注せしむることを得るの結果、其の場所に關係すること甚大なり、故に完全に讀書の利益を收めんと欲するものは、場所を選擇すること亦た必要なり、何となれば吾人の耳目は、讀書中と云へども諸般の事物に向て作用するを以て、若し外界喧擾なるときは心神は幾分之れか爲めに割かれ、完全に注意力を集注すること能はされはなり、故に讀書の人は、靜寂の場所を選定せざるへからざるなり、即ち塵

烟雜沓の街衢よりも、山水明眉の閑地を擇ふべきなり、之れ實に靜寂にして讀書に便なるのみならず、身軀の健康に利すること甚大なり、昔は羅仲素、春秋を解する見識淺し、羅浮山に住む三四年、後ちまた書を見る、自から透徹することを得たりと、以て場所の如何に讀書に影響するかを知るに足らん。

場所選定の標準に就ては、一言閑靜の地區を擇ふべしと云ふを以て足れりとす、其他衛生習俗等に注意すべきは勿論なり、但し子弟を教育するに當ては孟母三遷の法に則るへし、又た讀書の人と云へとも新に居を下する場合に在りては、此の三遷の法を斟酌して可なり。

以上は一般に讀書の場所として閑靜の地を擇ふべきことを云ふに過ぎず、而して其の閑靜の地を擇ふことを要するは、注意力を集注せしめんか爲めなり、從て若し喧擾の渦中に在るも、心神確固にして、注意力を讀書に集注することを得は、強て閑靜の地を擇ふの必要なきなり、今日高等なる學校は多く都會に設立せられあるを以て、此等

の學生は多く山水明眉の閑地に於て讀書するの機會を有せず、概ね下宿屋の一間に於て讀書するの外なきものなり、故に閑靜の居を擇ふことは、小學の程度にあるもの又は獨立の自修生等の部分を除きては言ふべくして行はれざることなり、然らば即ち這般のものは到底外境の喧擾を免がるゝこと能はざるを以て、注意力を集注することを得ざるか、否な注意力を集注することを得るに至る二個の事情あり、曰く自然より來るもの曰く人為より來るもの此れなり。

〇一、自然 自然より來るものとは、喧擾に馴るゝを云ふ、既に馴るゝ時は、其の妨害の程度を軽減することを得るなり。

〇二、人為 人為より來るものとは、心神を一にして他方に働かんとする耳目の作用を中止するを云ふ、之れ甚だ困難の事に屬す、而かも不能の事柄にあらざるなり、例へば圍碁に熱心するものは他事を顧みざるの類を以て見るべし、諺に曰ふ鹿を逐ふものは山を見すと、故に讀書にありても熱心に心神を傾注するときは、外界の喧擾

は其の注意力の集注を離散せしむることを得ざるものなり。

之れを要するに苟も讀書の人は其の居を閑靜の地に選定することを要す、然れども修學上の都合又は境遇によりて閑靜の地を選ふこと能はざるものは、前述二個の事情を利用して以て讀書の効力を收むることを計らるべきなり、今日都下に於て高等なる學科を専攻するの學生か、多く晝夜を顛倒して讀書するの慣習あるは、閑靜の地を選ふことを得ざるの結果、閑靜の時を利用するに在るなり、而かし夜讀の自然に反し心神を勞するの甚しきことは余は曩に述へし所なれば、此等の學生は宜しく余か前

述せし二個の事情に鑑み、正則の讀書法に従はんことを望むなり。

第六章 讀書の方法

第一節 暗記法

讀書は能く之れを理會し又能く之れを記憶することを必要とす。而して其の方法を分類して五となす、一に暗記法、二に謄寫法、三に抄録法、四に記入法、五に圖解法、是れなり、本節に於ては第一の暗記法を説明せんと欲す。

余が所謂暗記法とは、書籍の字句を其の儘記憶することを云ふものなり、維新前の我國の教育法に於ては此の方法は重用視せられたるものなり、今日に於ても支那の初學教育は猶ほ此の法を採用するもの如し。

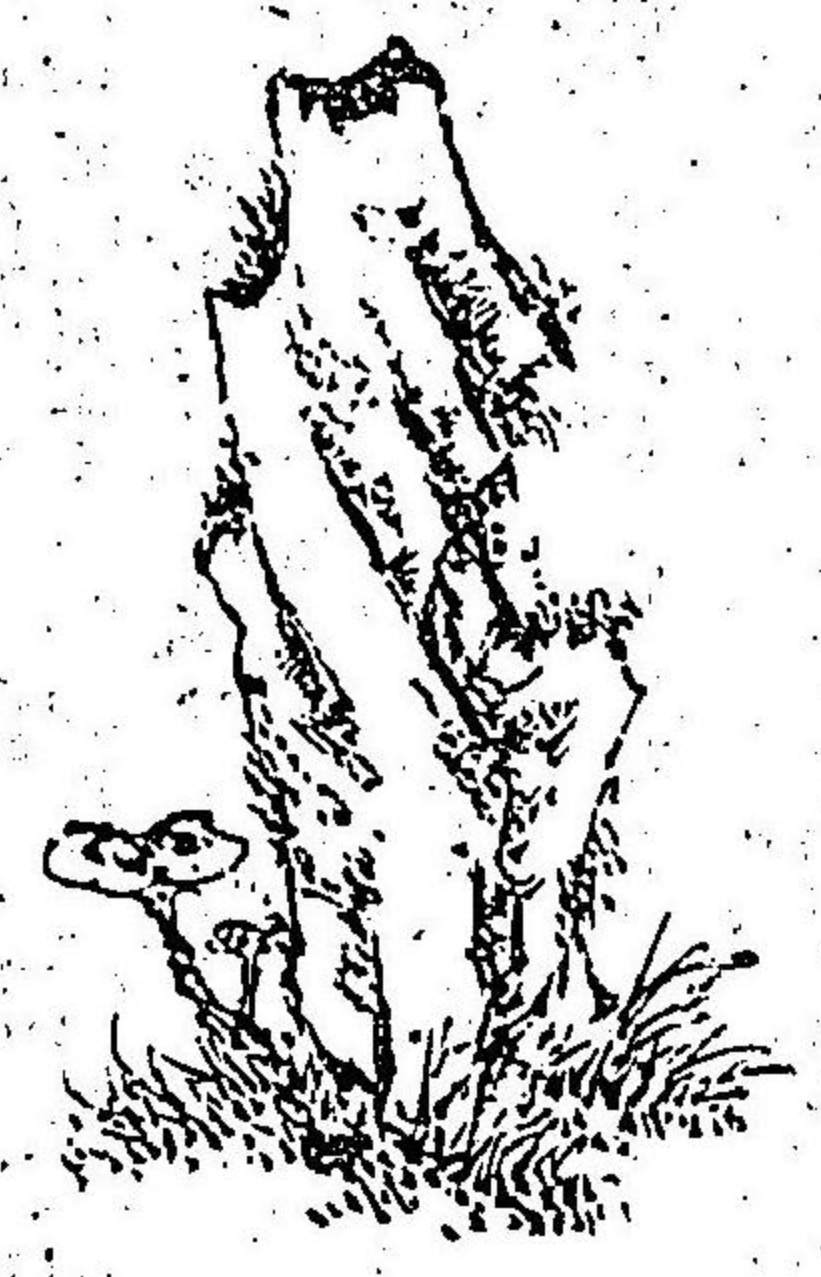
凡そ讀書の要は能く書籍の意義を會得して、新智識を増加し、且つ之れを記憶に存して、他日の用に供するに在り、換言すれば書籍の意義を會得することを主要とし、其の字句の如きは之れを記性に留むることを必要とせざるなり、從て暗記法は今日の

讀書に採用することを得ざるなり、近時文運の發達進歩は書籍の發行汗牛充棟も嘗ならず、此の繁忙の時に當り全部の書籍を暗記するか如きは實に無用の事に屬す、又た不能の事に屬す、ヨシ可能の事となすも器械的の暗記は讀書によりて得たる知識を應用すること能はざるものなれば、何等の利益なきものなり、加之吾人の記憶性を疲勞せしめ、引て讀書能力の發達を障害するに至るものなり。

古昔書籍に限ありし時代に於ては、之れを暗記する或は可能の事なりしならん、或は記憶力の練習として有用なりしならん、然れども今日百科の學開け、一科の書籍と云へとも亦た數千數百を數ふるの時に於て、書籍の字句の全部を暗記するか如きは、愚の甚しきものなり、故に今日に於ては、單に原文を暗記する方法は到底採用することを得ざるなり、唯た作文又は談話演說の材料として詩歌文章格言の類を暗記することは敢て咎むべきにあらざるのみならず又た裨益する所甚だ多きを信するなり。

之れを要するに、意義の會得を力めず、單に字句を記憶せんとする暗記法なるものは、

今日の讀書法の排斥する所なり、何となれば讀書は文字を讀むにあらすして、其の意義を讀むものなればなり、其の字句は何等の價值を有せず、其字句によりて發表せられたる著者の思想に價值あるものなればなり、既に余が暗記法を讀書法より除外するに拘らず、此に之れを掲ぐる所以のものは、維新前我國に於て又た現時の支那に於て此法の行はれつゝあり、且つ今日に於ても前項に陳へし如く、詩歌文章格言の類は時に暗記するの利益あるを以てなり。



第二節 膽寫法

膽寫法とは、自己か讀まんを欲する書籍の全文を寫取するの法なり、昔はデモスゼニス大に意を知識の増進と心力の發達とに注ぎ、スシダイテイスの著書を探りて研究し毫も他書を顧みず、反復熟讀遂に之れを膽寫すること八回に及べりと云へり、如何に古學か膽寫法に心懸けしかを知るに足らん、之れより此法の利害に就て研究せんとす。

○膽寫法の利を擧ぐるものは曰く。

- 一、注意を一點に集注することを得。
- 二、注意を一字一句の上に及はしむ。
- 三、精讀するの結果妙所を發見す。
- 四、精讀するの結果眞意を會得す。

五、從て記憶を永久に保存するを得。
○ 謄寫法の書を擧ぐるものは曰く。

- 一、時間及び勞力を消費すること大なり。
- 二、凡ての讀むべき書を寫すは不能なり。
- 三、往々器械的に陥りて効益を收むる能はず。

若し夫れ茲に完全無缺の書ありて、此の書冊のみに通せば、他の書籍は繙讀するを要せざるものとせば、之れを謄寫し其の一字一句の末に至るまで記憶すること極めて有益ならん、然れとも世間此の如きの完備の著書あるなし、充分なる知識は數書を涉獵して採長捨短の後に得らるべきものなれば、今日に當て一二の書冊に精通して満足する能はず、故に多くの時間と勞力を費して、書籍を寫謄するか如きは愚の至りなりと云ふべし。

况んや今日印刷事業の進歩發達は、如何なる大部の書冊なりとも容易に出版發行せら

れ、又た極めて廉價に購ひ得へきを以て、謄寫の如き繁雜の勞を取るの必要を見ざるなり。

吾人は無意に或事を爲す能はず、既に筆を取りて謄寫を爲すに當りては、心神は謄寫なる事柄に注意力を分つを以て、書物の意義を會得する爲めに注意力を集注すること能はざるなり、抑も謄寫の性質は、書籍の意義を會得して記性に留むるを主とするものにして、謄寫其のものは從たる動作に過ぎず、然れとも動もすれば反て多量の注意力を謄寫其のものゝ爲めに奪はれ、主従を倒顛するに至ることあり、此に於て謄寫は全く筆稿となりて器械的に流れ、讀書の眞の効益を收むること能はざるに至る、此れ余か屢々見聞する所なり、故に茲に完全の一個の書冊と、相當の時間あるも、之れを謄寫するか如きは、讀書法中の最も下等に位するものなりと知るべし。

前述の如く謄寫法は時間と勞力を消費すること多く、而して、其の効益少くして、得失相償はざるものなれば、課業多端の今日に於ては、或特別の場合を除く外、讀書

の方法として採用すること能はざるなり、而かも之れを前節の器械的の暗記法に比すれば、効果の勝れるものあるを見るあり。



第三節 抄録法

抄録法とは、書籍を讀むに當り其の文句又は意義を抄録し記憶を補助する方法を云ふ、分て抄書法摘要法の二となす。
抄書法とは、書中の文句を抄録して、後日の備忘に供するを云ふ、俗にヌキガキと稱するもの即ち是れなり、左に一例を示さん。

國語

三事 民は三に生る、之れに事ふ一の如くす、父之れを生み師之れに教へ君之れを食ふ、父にあらされは生ます、食にあらされは生せず、教にあらされは知らず。

淮南子

陰徳ある者必ず陽報あり。

論語

四勿 禮にあらすして視ること勿れ、禮にあらすして聽くこと勿れ、禮にあらすして言ふこと勿れ、禮にあらすして動くこと勿れ。

△文中子

三教 儒教(孔子を宗とす)、釋教(釋迦を宗とす)、道教(老子を宗とす)

伊勢貞丈記

首級 首を取るに爵を賜ふこと秦より始めり、敵の首一つを取りたる者は位一級を賜ふ、秦の時の法なり故に首級といふ。

十三經 孝經、論語、孟子、尙書、春秋、左氏傳、公羊傳、穀梁傳、周禮、儀禮、禮記、爾雅。

△女論語

凡そ女子たる者は、先つ身を立つるを學ふへし、立身の法は、唯た清貞を務むるにあり、清なれば即ち身潔く貞なれば即ち身榮ふ。

△三字經

玉琢かされは器を成さす、人學はされは義を知らす。

△遊仙窟

端座琴を横へ、涕と血と襟に流る、千思競ひ起り、百慮交々侵す、獨り眉を擧めて而して永結す、空しく膝を抱いて而して長く吟ふ。

深谷は地を帶り、崖岸の形を鑿穿せり、高嶺天に横つて、崗巒の勢を刀削せり、煙霞子細にして、泉石分明、實に天上の靈奇、乃ち人間の妙絶、目に見ざる所耳に聞かざる所なり。

△六雄八將論

豊臣太閤 天下強弱なき能はず、國家盛衰なき能はず、而して英雄豪傑は將に大に積衰積弱の餘に爲すあらんとす、必ずや踔厲風發一ひ天下の耳目を新にし、然る後能く衰弱を變して強盛と爲す、之れを暴雷猛雨に譬ふ、颯忽震蕩萬物殆んと之れが

爲めに摧碎す、然る後天地開霽、日月新の如し、故に英雄の事業は常理を以て論す
へからざるなり。

長恨歌

頭を回らして一笑すれば百媚生す、六宮の粉黛顔色なし。
後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に在り。

芙蓉は面の如く柳は眉の如し、此に對して如何ぞ涙を垂さる、春風桃李花開くの
夜、秋雨梧桐葉落つるの時。

天に在ては願くは比翼の鳥と作らん、地に在ては願くは連理の枝と爲らん。

以上の如く讀書の際に見當りたる要語名句を抄寫し置きて、時々記誦する時は、力を
用ゆること少くして、その益甚た多し、又之れを記憶して作文談話の資料となすも可
なり、此の法は今日用意善き學生間に行はるゝものにして、一の讀書方法に數ふるこ
とを得へし。

次に摘要法とは書中の要領を撮録して他日の參考に供するを云ふ、此の法は一方に於
ては理解力思考力注意力を進め、他の一方に於ては記憶力を補助するの効用を有す
るものにして、讀書法中最良の方法に屬す、凡そ人の記憶力は限りあり、無数の書を
悉く記憶すること能はず、然るに摘要法は書籍の大要を抽いて、簡明の文句を組織
し、以て後日の參考に供するものなれば、記憶の勞力を省くこと大に、而かも要領を
見て細目を聯想することを得るか故に、前の記憶を再生せしむること容易なり、例へ

は
一) 加藤清正は幼字を虎之助と云ふ、永祿五年六月二十四日を以て尾張國愛知郡中村に
生る、永祿元年出て、豊臣秀吉に仕へ、爾來勇猛剛強を以て英名赫々たり、慶長二
年日明の和議破るゝや、直ちに朝鮮に入り、勇戦尤も務む、此に於てか其名益々鳴
る、豊臣氏亡ひ徳川家康天下を掌握するに至り、客將として、家康に仕へ、慶長十
年四月從五位上侍從兼肥後守を拜す、同十六年六月二十四日卒す、年五十歳。

- (二) 青砥左衛門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋にいれて持ちたる錢を十文取はつして滑河へぞ落し入りたりける。
- (三) 東西南北、良巽乾坤
- (四) 人生十年を幼と云ふ學ふ、二十年を弱と云ふ冠す、三十年を壯と云ふ室あり、四十年を強と云ふ仕ふ、五十年を艾と云ふ官政に服く、六十年を耆と云ふ。
- (五)
 - (1) 世の中に生とし生るものは皆なたゞ玉の緒の長かれとこそ
 - (2) 山守の許さぬほどは谷蔭にあちたる栗を拾はさるへし
 - (3) 我家にやしない置ける犬たにも撃ち罵りて責しと思ひ
 - (4) 塵はかり怒りて忍へしのひてぞ

山より高く徳は積もらん

右の文句を簡約するときは

- (一) 加藤清正幼字虎之助、永祿五年尾州中村に生る、元祿元年秀吉に仕へ、剛直を以て聞ゆ、征韓の役勇名あり、豊氏亡後家康に仕へ、慶長十年從五位上侍從兼肥後守を拜し同十六年卒す、年五十。
 - (二) 藤綱北條氏に夕す、途に誤て錢十文を滑川に墜す。
 - (三) 四方四偶
 - (四) 四十幼、二十弱、三十壯、四十強、五十艾、六十耆。
 - (五) (1) 不殺生 (2) 不偷盜 (3) 不惡口 (4) 不瞋意。
- 以上は單に其の一例を示すに止まる、如何なる書籍と云へとも、一字一句悉く深遠の意味を有するものに非ず、故に摘要法は何等の書物に付ても用ゐらるゝの方法なり、而かも此法は、錯雜又は繁冗なる文句に就て明瞭に理會することを前提とするも

のなれば、思慮考察を要するものにして、初學者は直ちに善良の結果を收むること能はざるの憂あり、然れども漸次學識の進歩に従ひ、又た常に練習するときには、終には功妙となりて、十分の効果を收むるに至るへし、故に苟も熟讀を要すべき書物に接するときは、常に此方法を試むへし、此方法を用ゆるに付て注意すべき件を擧げは左の如し。

- 一、細密に渡らす、簡畧を主とすへし。
- 二、主要の點を逸すへからず。
- 三、眞義を求むるを主とし文句に拘泥すること勿れ。
- 四、著者の用ゐたる言語文字を全く度外に置くこと勿れ。



第四節 記入法

記入法とは讀むべき書籍其ものに或文句若くは記號を記入して、再讀に便ならしむるの方法を云ふ、分て圈點法見出法書入法の三種となす。

○の圈點法とは、文句の主要の個所に或符號を付するの法にして書物の種類により、文を主として付する場合と、意を主として付する場合との二あり、此れ他日の參考引用及び再讀に便なる方法にして、今日の學生殊に高等専門の學生間に廣く行はるゝ所なり、例へば

文祿元年二月二十八日、征韓の爲め秀吉の京師を發するや、或人曰く、宜しく漢文を善くする者に従ふへし、秀吉笑て曰く、我れ此の行、將に彼れをして、我文を用ひしめんとする耳。

初め西門女院の侍從に小宰相の局といふもの有り、故刑部郷憲方の小女にして、貌

は花よりも麗かに、情は春よりも暖かに、座する處、つねに三日の香を留む。
 たのしき人を見ても、うらやむへからず、ますしき人を見てもいやしむべからず、
 富貴と貧窮も過去の宿因なれば、今なす處の利鈍にはあらずとさとりみれば、ねが
 ふべき富貴もあらず、いとふべき貧賤もあらず。
 戰場に於て聊も未練の事を爲すべからず、吳子曰く、生を必せば則ち死し、死を必
 せば即ち生く。

兄弟に對し聊も疎略すへからざる事、後漢書に曰く、兄弟は左右の手なり。

信房の言行に徴して之れを見るに、彼れか戰勝攻取の蹟武畧奇傳の功を成すもの、
 所謂戰場常在の四字を確信し、以て終生の銘となしたるか故なり、蓋し彼れは兵を
 山本勘助に得て、而して略を武田信玄に倣ひたるものなり、已に君として武田信玄
 あり、師として山本勘助あり、武勇知謀の將たらざらんと欲するも能はざるなり。

此の法は前節に述べたる抄書法を書物其もの、面に利用するものにして、後日の參考

引用の便に資すること大なり、圈點は元と注意力を集注し、記臆を喚起する爲めに用
 ゆるものなれば、色筆を以て付すを可とす。

見出法とは書中に伏在せる要點を發見し、之れを欄外に表記し後日の便に供するを云
 ふ、之れ前節の摘要法を書物其もの、面に利用したるものなり、例へば

比良の暮雪、 矢橋の歸帆、

石山の秋月、 勢多の夕照、

近江八景、 三井の晚鐘、 堅田の落雁、

粟津の晴嵐、 辛崎の夜雨、

相模 武藏 安房 上總

坂東八州、 下總 常陸 上野 下野

世俗厄年の辨、 厄年と云ふ事人の氣にかけて祈禱なとすることあり、十九、二十五、
 三十三、四十二を厄年と云ふ、十九は重苦と云ふ心なり、二十五は

厄年は意に介すへきことにあらず

五五、二十五と云ふによりて、五五を後後三重後と取りなし死後のこととして思むなり、三十三は三三と重なる故、散々と取りなし思むなり、四十二は四二と續く故死と取りなし思むなり、皆な物いまひより出て、ラチモなき事なり、婦人など思なる故左もあるべし、男子などの氣にかくへきことにあらず。

家康武田信玄の家法に則て自家の家法を制す

家康晩年に及て、酒井忠勝安藤重信に謂て曰く、我れ壯年より老年に至る迄、國家治平の途に心を盡し勤勞を爲すこと久し、往年今川氏に服して後ち之れに敵し、織田氏に敵して、後ち之れに服し、武田氏に和して後ち之れに敵し、北條氏に敵して、後ち之れに和し、豊臣氏に敵して後ち之れに服す、是れ我が國家を全ふせんと欲せしか故なり、或は従つて之れを視、或は倅て之れを察するに武田信玄の家法の如き整ひたる事は有らず、之れに依り往年武田の家法に則て、我が家の軍法

を定め、井伊直政に命して訓練せしむ。

右の如く書物を讀むに當りて、其の主要の點又は其意義を代表すべき文句を欄外に記入して以て再讀に便するなり、此の法は亦た今日專攻の學生か使用しつゝある所に於て、其の効益甚た大なるものなり、而かも簡明に代表語を記入するものなれば、常に之れを練習して要點を巧に發見するの能力を養成すべし。

次に書入法とは、書物の意義を釋明する爲め他の見聞に依りて得たる事柄を其書物に記入補充して以て一々參考書を見るの勞を省くを云ふ、例へば

漢の武帝の臣、勅命を封して遍く四域の諸國を巡察す功を以て博望侯に封せらる。

張騫は三德兼備の名將にして、四民之れに悅服す。

「智仁勇」

「士農工商」

鄭の風土記に云ふ、鄭人妖冶なり、春月毎に溱洧兩水の上に相期して相共樂む、日暮將に相別れんとするや、乃ち芳蘭を折て相贈るを例とす。

韓詩外傳に云ふ、昔鄭交甫楚に適かんとして、途に二女に遇ふ、二女態服して環珮を具す、兩珠大さ鷄卵の如し、交甫之れを二女に乞ふ、二女遂に珮を解き而して與ふ、交甫受け而して之を懷にし、趨ると十歩之を見ず、是れ則ち「一」又た二女を邂逅すれば其影を見ず

復た蘭を贈り珮を解くと雖も、未だ甚た懷に關はず、合盃横陳するも何ぞ曾て意に

禮記に曰く盃を合し而して醕すと夫婦の盃なり
「身の傍に在て横臥するなり」

慚はんや。
〔心服する義適合の意なり〕

秋胡は魯の人なり、妻を娶り五日にして陳に官遊し、五年にして乃ち歸る、路傍に桑を採るの一美人あるを
見、胡曰く吾れ行路悠遠あり、願くは桑陰の下に託して一食せんと、婦人應せず、胡曰く吾に金を
り願くは家に還り金を以て母に遺る、母人をして胡を呼はしむ、到れば乃ち胡か向に戯れたる採桑
の女なり、婦人曰く君家を辭し五年にして還る、當に疾走して至るべきなり、今道傍の婦人を悦ぶ能は
す、請ふ改め娶れと、遂に去り東走して自から河に投じて死す。

秋胡か眼の拙ふして枉て黄金を費すことを忿む。

以上の如く、或字句を釋明する爲め書籍の餘白に註解補充的の記入を爲し置く時は、
再び其の書を読むに當りて甚た便益を感ずるなり、若し一の字句に就て二様以上の學
說ある時は共に之れを記入し、對照比較して研究することを得べし、殊に同種類の書
籍、例へば中等教育の日本歴史十種ありとせば、其の中最も詳細にして且つ適正なり
と信ずるもの一種を取り、而して順次他の九種を繙讀し、以て其の異點を記入し、又
は足らざるを書入し、此に自己の書籍を十種中の最上優等のものとなすことを得べし、

而して此の自己の最上優等の一種を熟讀するときは、十種の書籍を讀みたと同一の
智識を得べし、之れ常に書籍購入の費用を省くことを得るのみならず、比較對照觀念
によりて思想を練習し、記憶を補助すること甚た大なり。

然れとも今日此の書入法は未だ一般に行はれず、此れ在來の書籍に餘白少きと、又た
學生か書籍を鄭重に失するの結果なり、昔時に在ては學者多くは此の方法を採り甚た
しきに至りては、別紙數枚を粘付して以て書入を爲したるものあるを見るなり、唯だ
今日に於て専攻の法學生は此法を採用し、又た書籍に於ても特に餘白を存して書入用
として發行するものあり、此法は前述の如く、讀書修學上の利便尠からざるを以て、

一般の學生に在ても早晚採用するに至るべきを信するなり。
要するに記入法は思想を練習し比較研究の智識を養成し、注意力を周密ならしむるを
以て専門學生は勿論普通の學生に在ても採用すべき良方法なりとす。

第五節 圖解法

圖解法とは全編の構成論述の關係等に就て具さに骨格脈絡を精査し、圖式を以て一表に作るを云ふ、此の法は書籍の大意を明にし、後日の參考に益し、記憶の力を助け、又た觀察力 思考力 判別力を養成し一般に讀書能力に利すること大なるを以て、讀書法中最も優良の方法なりとす、殊に議論高尚にして事實の錯綜せる浩瀚なる著書に於て、其の前後の關係一貫の理論等を精確明瞭に理會せんと欲せば、此法を措ひて他に良法あらざるべし、例へば民法親族編に就て簡短の一例を示せば

定義親族法は私法の一部にして人の親族上の干係を規定するものなり

發生——婚姻——出生——養子縁組

親族法——親族干係 効果——權利を與へ義務を負はしめ能力を制限す

消滅——天然の血縁に出てたる干係は永遠に消滅せず人為の干係は

（離縁離縁によりて消滅す）



此の法は思考力 判別力 等の智力作用を要するを以て、人により功拙の差あるを免かれず、故に初學者に在りては直ちに好結果を收むると能はざるの憂あり、然れとも漸次経験を積み又た學力の進歩に従ひ思慮考察の觀念に富むに至らば、終には精功に達することを得へし、故に讀者は宜しく簡短なるものより漸次精密なるものに入り、常に此の法を練習すべきなり、若し夫れ編成完備にして順序明確照應接續等井然亂れざる書籍にありては、目錄其のものを標準として容易に圖解を作ることを得へし、然れとも今日此類の良書に乏し、從て圖解を作ること甚だ困難なり、而かも學生は宜しく其の困難を排し倦怠を忍び、務めて此法を修練すべし、蓋し圖解を作ること困難

なる書籍あるが故に、圖解を作ること益々必要なるなり、此の圖解法の利益は常に他日の參考再讀に便なるの一點にあらざ、實に明晰なる觀念を得るに於て最も好良なる方法なり。

近時出版の書籍大概目錄を付せざるなく、間々索引さへも付するものあり、此の目次にして完全詳細なるものは、一種圖解的の効益あるものなれば、誦讀の際能く目錄に注意し常に本文と對照し、讀了の後復た細かに目錄を閲して以て書籍全般の概要を視察するも、一種の讀書法なるべし、抑も目錄なるものは書籍の内容を順序的に分解したるものにして、最も緊要なるものなり、若し夫れ完全に精細に論理的に作られたる目錄は一の圖解と稱するも不可なき程にして、讀者に便益を興ふること頗る大なり、故に苟も讀書の人は目錄を吟味し之れを利用することを怠るべからず。

一、簡明を主とすべし。

次に圖解を作るに付き注意すべき諸件を擧ぐれば左の如し。

二、順序分類論理的なるべし。

三、字句に拘泥せず趣旨を取るべし。

四、著者の用ゐたる字句を規準とすべし。

之れを要するに讀書法中圖解法を以て最も好良の方法となす、而して之れに次くものは先に第三節中に述べたる摘要法なりとす、其他の方法も亦た隨時採用して効益あることは余が信じて疑はざる所なり、唯だ暗記法及び謄寫法に至りては今日殆んど利用すること能はざるなり。

終りに臨み一言すべき事あり、彼の獨修者が餘りに字彙注釋等に依頼するが如く、専ら本章に掲げたる讀書の方法のみに依頼し、例へば手簿又は圖解表のみに依頼し、記憶力を忽にするが如きことあらば、却て此の方法は有害無益のものとなるべし、換言すれば讀書の諸方法は忘れざる爲め即ち記憶の爲めに設けられたる法にして、忘れることある爲め即ち備忘の爲めに設けられたる法にあらざること銘心せらるべし。

第七章 讀書の諸弊

第一節 多讀の弊

朱子曰く、書は精熟を貴ぶ、多きを食るを貴ばずと、實に然り吾人の能力は限りあるを以て徒らに多讀を食るときは、思考を紊亂し、心深く入ること能はず、遂に蛇蜂とらずに終るべし、寧ろ力を小部に集注し、既に成て順を遂ふて進み行くに若かざるなり、讀書は猶ほ飲食の如し暴飲大食か吾人の身軀を傷ふ如く、多讀は吾人の精神を損ふなり。

世人較もすれば、書を多く讀みだにすれば知識を獲得すべしと考へ、精神適度の分量を顧みず、多讀博覽を以て誇るものあり、此れ即ち書籍即ち知識なりと思惟せるものにして誤れるの甚しきなり、書籍其ものは決して知識にあらざるなり、蓋し讀書なるものは知識開發の手段にして目的にあらざり、即ち書籍は著者の思想を表明し傳播するもの

る媒介物に過ぎずして、書籍其ものは吾人が修學の目的にあらざるなり、然らば即ち書籍は單に其の手段たるのみ、既に此の理義を明にするときは讀書の眞の目的は、多くの書籍を讀むにあらざりして、精く著者の思想を會得するに在るを知るべし。然らば即ち讀書の分量如何、此れ甚だ困難なる問題にして今各人に通して其の分量を表示すること能はず、何となれば、身軀精神の發育は各人の面の如く人毎に均一ならざればなり、然れども概言すれば、讀書して趣味を感ぜざるに至りたるときは、最早其の分量を超へたるものと云ふべし、蓋し此の場合には精神疲勞して讀書能力が完全な作用を爲すこと能はざるに至りたる時なればなり、若し讀書して此に至らば、直ちに讀書を止め、友人を訪問し又は郊外に散歩し精神を休息せしむべし、此時に當て強て讀書するも常に書籍の意義を會得すること能はざるのみならず、心神を害すること大なり。

古今の大家多く多讀の弊を言ふ、マヨン、ロック曰く、多讀者必ずしも多く知れるもの

ならず、アルターク曰く飽食の害は飢渴よりも甚だしきものなり、多讀の害も亦然り、ステワルトも亦た曰く思考することなく、唯廣く且つ多く讀むときは反て大に智力を弱くするものなり、而して吾人の主義見識は錯雜なる智識の間に滅没すへし、アトキンソン曰く罷勉なる讀者の重要問題は幾何の書を讀むべきやにあらすして、如何なる書籍を如何に讀むべきやにあり、美味に飽くもの必ずしも強健ならず、少讀するもの必ずしも淺學ならず、エドワード、ヘール曰く、一時に多く讀むへからず、疲勞を覺ゆるあらは、直ちに休むべし、而して成るべく復讀すへしと、多讀の弊害あること此等先哲の言に徴して以て知るべきなり、若し夫れ不良の書を多く讀むに至ては其害一層甚しきものあり、讀書の人宜しく注意すへし。

第二節 速讀の弊

讀書の要は書籍の内容を會得することにあるを以て、徒らに一書を讀了するを以て其の目的を達し得へきにあらす、此に於てか、注意して讀むへし、考へつゝ讀むべしとの規則あり、而して速讀なるものは此の規則と相容れざるなり、無暗に速讀して幾萬秩の書を讀了するも、不完全なる圖書解題否な寧ろ圖書目錄となるに止まりて、其の要領主意のある所は大抵忘却し、遂に讀書の効力を收むること能はざるに至るへきなり、故に讀書の人は徒らに歩武を進むへからず、十分に意義を會得し、而して後漸次進むへきなり、猥りに速讀するは、恰も瀛車旅行の名所古蹟を探る能はざるか如く、書籍の要點を發見することを得ざるの恐あり、然るに今日の學生を觀るに多く一書を速讀するを以て誇り、而かも自から讀書の無効なるを覺らざるなり、此れ實に讀書法を知らざるの罪にして誠に惜むべきなり。

假令讀むべきの書籍多くありて、時間の不足する場合にありても、決して速讀すること勿れ、讀書は精神の慾望にして時と場合によりて増減し又た進退す、從て一定の時間の下に書籍を配當して無理に讀了せんとするも、精神若し欲せされは何等の効益なかるべきなり、速讀は多く時間の制限を以て讀書せんとする學生に行はるゝものにして、平常の不勉強家か試験前に於て見る所なり、又た多讀を以て能事となし博覽を以て謳はれんと欲する徒のなす所にして、其の有害無効たるや勿論なり、但し一定の時間を讀書に配當することは必ずしも思むべき事にあらず、寧ろ讀書の秩序として奨励すべき事に屬す、然れども此れ一定の時間を専ら讀書に費すべしとの意にして、一定の書籍を或時間内に讀了すべしとの主意にあらざるなり、今日の學生多くは之れを誤解し、遂に時間割に重きを置き速讀の弊に陥るもの尠からず、甚たしきに至ては時間の満了を以て讀書を中廢するものあり、主従を顛倒するものと云ふべし、蓋し日課なるものは書籍を讀むを主とし、時間割は其從たるものに過ぎざるなり。

速讀は前述の如く尤も思むべきものなり、然れども茲に速讀を爲す唯一の場合あり、一度迅速に全篇を閲讀し、更に可憚に再讀せんとことを要する場合之れなり、例へば議論高尚にして事實錯綜し論理精微なる書籍を初めて繙讀する場合は、到底一讀するも其の主意を會得すること能はず、必ずや再三再四精讀することを必要とするなり、又た初めより精讀せんとするも、其の理義全篇に干係せるを以て、徒らに時間を費し頭腦を痛ましむるに止まる、此の如き書は先づ全篇を讀了して其の觀念を得然る後、更に精讀するを以て便なりとす、此の場合に於ける速讀は再讀の準備として効用あるものなり、政治法律經濟の如き高等専門なる書籍を研究する學生間に於ては、此の方法は最も有益必要なるを信す、而かも他の一般學生にありては初めより精讀して速讀の習慣を作らざるを可とす。

第三節 飛讀の弊

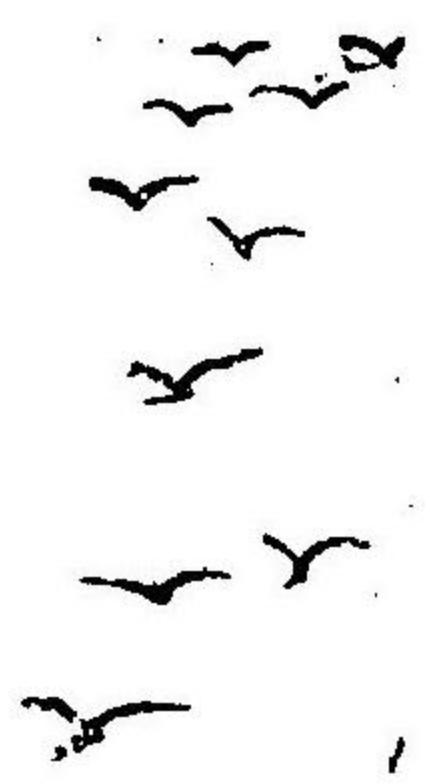
書籍は全篇に通して精讀することを要す、元より一部の書籍の内容は一言一句悉く金玉なるにあらざ、中には無用冗語あるへしと云へとも、其の之れを發見するは精讀の後に在り、故に書籍の全文句を完全に精讀せざるへからず、ペーコン公曰く、一部分を讀めは以て足れりとする書籍あり、全部を一讀すへきものあり、又微細に全部を熟讀すへきものありと、此れ元より書籍の内容の觀察として至當なるの言と云ふべし、然れとも之れを以て直ちに飛讀すべき書ありと解するは誤れり、初より此の如き書なることを知り、且つ讀むへき所讀むべからざる所を識別するに於ては、何人も讀むべき處のみを讀み、讀むへからざる所を讀むの愚を爲さるべし、故に飛讀なるものは一般學生の傲ふべきものにあらざるなり、何となれば書物の讀むへき所讀むに足らざる所を識別すること困難にして、多く粗讀に陥るのみならず、徒らに書籍の内容を批

評するの觀念のみ増長し、稍もすれば、書籍を輕視するに至るべきなり、殊に兎んや未だ知識の淺少なる初學者にありては、全く書籍の内容の讀むへき所讀むへからざる所を識別するの能力なきものなれば、飛讀の如きは決して採用せしむべきものにあらざるなり、加之飛讀は俗に山を掛けるの習慣を生じ、明確精密なる思想を養成するの妨害となるものなり、要するに書物を讀むに當りては、第一に著者の文句に就て其思想の在る所を知了せざるべからず、此場合に於て一應著者の説を信仰すべし、第二に疑問を起さるへからず、第三に答解を與へざるへからず、第四に自己の見識を確立すべし、此に至て讀書の目的は達したるものと云ふへきなり、然るに飛讀は此の順序觀念に於て第一の階段を完全に踐む能はざるの弊あり、此れ余か飛讀を排斥する所以なり、但し思想確實なる高等の學生にありては、屢々飛讀を爲すの利益及ひ必要あるは余の信する所なれとも、初學生にありては、此法を用ゆへからざるなり。

第四節 固執の弊

孟子曰く、悉く書を信せば寧ろ書なきに若かすと、是れ因執の弊を彈して餘蘊なきものと云ふべし、古賀洞庵も曰く固陋なれば即ち執滯通せず、寧ろ固陋ならんよりは該博に失せん哉と、余か屢々一書を熟讀せよと云ふは他書を讀む勿れと云ふにあらざるなり、惟ふに書籍は著者の思想を表明したるものに過ぎず、而して其思想なるものは常に確正適實なりと云ふ能はず、此に於て一個の事柄に就て數説を生ずるなり、故に吾人は比較研究の法に依るにあらざれば、到底眞理を發見することを得ざるなり、此れ著者の能力の差違及び着眼の差異より生ずる當然の結果にして、直ちに其是非善惡正否を決すること能はず、且つ各々一長一短ありて、著書なるものは慨して吾人に多少の利益を與ふるものなれば、一個の書物を固信する時は他書の長所を伺ふこと能はず、從て自己の書籍の短所を知ること能はずして、思想偏狹し讀書の効果を完

全に收用すること能はざるに至るべし。又た吾人の見識は元より一定確立するを必要とす、然れども時に之れを改むるは敢て不名譽にあらざるなり、蓋し日進月歩の今日に於て徒らに自説を固守して他の説を顧みざるか如きは、余の採らざる所なり、殊に况んや今日の青年か一部の書籍を迷信し、以て自から偏狹なる一見地を樹立し、猥りに論難攻撃を事とし、較もすれば先哲の學説を批義せんとするか如きは、學業の進歩を阻止せしむるものにして、甚だ思むべきことなりとす、要するに一書を固執するは勿論、一の意見を固執するか如きは學生の爲めに取らざる所なり。



第八章 讀書雜件

第一節 復讀

凡そ書籍は、始終一字一句を遺漏なく讀み了りたりとも之れを記憶に止むること能はされは何の益かあらん、然れども如何に強記の人も一讀して全く記憶し得るものはあらざるなり、此に於てか復讀の必要あり、蓋し復讀は注意の能力を強度ならしめ、成るべく正確に記性に把住せしむるの効用あるものなればなり、ルーテル曰く、或善良なる書籍は屢々復讀すること必要なりと、蘇東坡も曰く少年學を爲す者一書毎に宜しく數次之れを讀むべしと、以て復讀は讀書に於ける重要な事柄なるを知るべし。

今日學生の有様を見るに特に受験用の書籍の外之れを復讀することなきか如し、殊に學校にて教授を受けたる書籍の如きは試験の間際まで放擲し置き、イザ試験といふ時に至り、一心不亂に記誦し、専ら器械的暗記の力に借りて試験の關門を通過せんとす、

此れ實に惡弊なりと云ふ可し、宜しく平素に於て再三再四復讀玩味せざるべからず。

ナボレチンの書は讀むや一讀先つ梗概を明にして一節一節批評を加へ、再讀其の批評の當否を審査し、三讀にして全く其の一書に通せざる所なきに至りしと云ふ、偉人の用意を見るべし、此の如く復讀は讀書に於て必要欠くべからざるものなれとも、徒らに忘失を恐れて單に一二の書籍のみを復讀するは、眞に復讀の効益を解するものと云ふべからず、換言すれば復讀は書籍の眞意を十分に會得せしめ、腦髓印象を深からしめんか爲めに必要にして、決して器械的の記憶を保たしめんとする所以にあらされはなり、又た復讀は單に記憶を助くるの點のみにあらずして、理會の力を増進するものなれば、苟も讀書の利益を收めんと欲するものは、必ずや復讀を懈るべからざるなり。

第二節 疑問

疑問は理會を完ふする所以にして、讀書に於て最も重要な事なりとす、夫れ人は神に非ず聖に非ず、何ぞ萬理に通せんや、事々物々疑問を發するなり、而かも疑問は知識進歩の階級なり、古人曰く唯疑つて後悟るなり、小疑生すれば則ち小悟し、大疑生すれば則ち大悟す又曰く悟るの難きに非ず疑の難きなりと、格言集抄にも曰く、何事も聞かぬこと後學にならず、門前の小供ならはぬ經を讀み、勸學院の雀は蒙求をさしずる、歌人は居ながら名所を知る、問ふことを恥るもるは一生知なし、井の内の蛙は大海を知らずと、先哲の學を爲すや、疑あれは必ず之れを人に質し、以て自己の知見を完ふせんことを計る、小疑も亦た忽にせざるなり。

讀書するに當りて疑問を發する時は、直ちに之れか答解を得んことを力めざるへからず、若し其の勞を惜みて其儘に空過するときは、其後屢々同一若くは先の疑問に索連

せる疑問續出して、遂には其書の趣旨を全く了解すること能はざるに至ることあり、故に疑問は一の關所と心得一ツ一ツ之れを釋明して以て頁を進めざるへからず、今日の學生動もすれば一書を早讀することを事とし、疑問を等閑に附するものあり、或は耻として疑問を埋没することあり、過れるの甚しきなり、疑問起らば識者に就て直ちに之れを質し以て自己の思想を満足せしむべし、但し疑問を人に質すを必要とすればとて、自から答解を考ふることなく、疑點毎に他人に問ふに至ては所謂器械的となりて、自己の思考力を進むること能はず、故に疑問起るときは先自から答解を付することを覺悟せざるべからず、而して千思百考遂に決すること能はざるに至り、此に初めて他人に質し以て其の答解を求むべきなり、此の如くするときは、他人の説明を速に會得することを得、又た自己の思考せし状態に比較し、殊に智力を増進するに至らんこと必せり、要するに讀書子は小疑と雖も必ず之れを質することを心懸くべきなり。

第三節 讀 方

本節に於ては音讀と默讀の利害に就て少しく述べんとす、古昔寺小屋教育の時代にありては、専ら音讀の方法を探りたるが如し、林子平の八徳にも其の第三條に卯の時起きて高聲に讀書すべしとあり、又吾伊を戒むと云ふこともあり、吾伊とは口ドモリて讀聲を長く引き讀むことを云ふなり、即ち吾伊の二字唐音にてはウウイイと讀むなり、今日俗に新聞讀と稱するものは是れなり、此等の事に徴するに昔は音讀を以て教育せしことを知るに足れり、然れども今日に於ては、學修の書籍昔時の如く一律單純ならざるを以て其の眞意を完全に記性に把住せんとするには、靜閑の場所に於て默讀するを可とす、或は人によりて音讀する方其の意義を了解すと言ふものもあるも、此れ自己が音讀の惡癖を辯護するものにして採るに足らざるなり、音讀は常に腦髓印象に好良の方法にあらざるのみならず、種々の缺點あり、例へば下宿屋等にありては他人

の讀書を妨害す、或は一種の癖となりて、默讀すべからざる所即ち圖書館等に至りて急に默讀を爲すも反て理解すること能はざるに至ること之れなり。

次に音讀が記性の把住即ち記憶保存に不利なる所以を述べんに、凡そ人口に聲を出すときは、氣即ち飛揚し、心靜ならず、注意離散す、此に於てか十分に書中の意義を腦髓に印象すること能はざるなり、元より音讀の場合にありて聲を出すことは從にして書物の意義を會得することは主なりと云へども、時として主従を顛倒し、徒らに發音に注意を勞して、領會に注意を怠るに至ることあり、恰も筆者其の文の巧拙を考ふる能はざるが如し、學生たるもの宜しく音讀を排し默讀の良慣を養成すべし。



第四節 書齋

讀書は通常書齋に於て爲すべきものなり、而して書齋即ち讀書する場所の選定に就ては第五章第三節に之れを述べり、此には書齋に於て注意すべき二三を説かんとす。

第一 書齋の整頓

凡そ讀書は注意力を一點に集注することを要するものなれば、目的の確立即ち内因と位置の静寂即ち外因の二者を具備せざるべからず、此に云ふ書齋の整頓の如きは、最も近き外因に就ての問題なり、苟も注意の散亂心神の錯雜を防がんとせば、先づ書齋を整頓せざるべからず、即ち筆硯書籍等を各々其の位置に整頓し、毫も此等のものに心を傾くるの要なきに至らしめざるべからず、若し不秩序に之れを取り亂し置くときは、常に採用に不便なるのみならず、心神も常に不安の状態にありて讀書に注意を集注すること能はざるに至る、故に讀書するに當りては先づ書齋を整

頓する事を要す。

第二 姿勢の端正

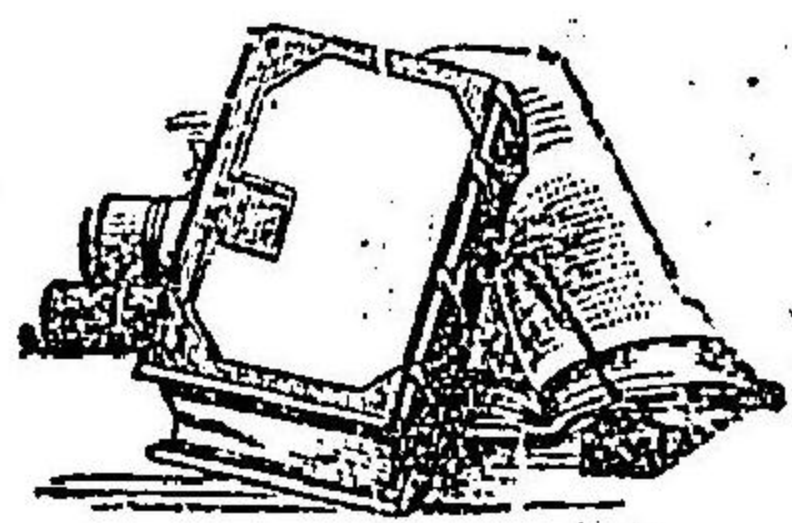
吾人の心身は常に密接の關係を有す、即ち身体衰弱するときは精神亦た疲勞し、身体強壯なるときは精神亦た爽快なり、但し或特別の事情の爲め、身体と精神との状態の一致せざる事あり、然れども一般に之れを云ふときは身体と精神とは以上の如く伴隨的の關係を有するものとす、例へば懶惰倦怠の精神は身体を横臥せしめ謹嚴端正の精神は身体を直立せしむ、之れを身体の側より云ふときは、姿勢の正否は精神の状態に關係するを知るに足るべし。書籍は正確公平謹直の心を以て讀むべきものなり、從て讀書の際に於ては先づ姿勢を正すの必要あり、若し姿勢亂るときは心も亦た緩み、遂に明確に書中の意義を會得すること能はざるに至るべし、故に學生が書齋にありて書を讀むに當りては、常に姿勢を正ふし、苟も態度を亂さざる様注意すべきなり、例へば羽織袴を着し

て静坐し心身を整理するが如きは最も良法なり。

第三 書籍の整理

書籍は思想の寶庫なり、ランドール曰く智者の書きしものは吾人の子孫が消費し得ざる唯一の富なりと、書籍は此の如く吾人に取りて良師友たるものなれば、濫雑ならざる様一定の位置に整理し、又た散佚毀損せざる様鄭重に保存すべし。

以上は書齋に於て、讀書に關し注意すべき主要の事柄なり、但し徒らに此の注意のみに偏し肝要の讀書時間を減ずるに至ること勿れ。



附 錄

讀書格言

はしがき
讀書法の問題は實際の問題にして、實地に適用し得べき方法を尋求するにあり、從て先哲か其の經驗學識より發したる讀書に關する金玉の言の如きは、最も好的の答解たるの價值あるものなり、此れ余か茲に各國の讀書格言を附する所以なり。

日本

貝原益軒曰く 凡そ事を爲すには始を謹み終りを慮れば過寡く悔ひ少なし故に事を作すには先づ思へ思はずして輕卒に事を作せば必ず過有り 過有れば必ず悔ひ有り。

室鳩巢曰く 書を讀むには精熟ならん事を要す多きを要せず一寸の鐵も善く鍛へは人を殺し三尺の劍も鈍ならば人を傷くること能はず。

林子平曰く 讀書怠る事勿れ、讀書は萬能の基なり。

佐藤直方曰く 吾人の學をなす一定の見あるを要す然らすんは修身書を讀むも其身に益あるを見ず蓋し學者實に其身の病をなす者を知らば則ち持養克治の切豈一日も忘る可んや唯慣々悠悠浪りに光陰を費すときは人欲日に長じ病痛日に厚く終に小人の域に歸して猶ほ自ら知らず朱氏言へるあり「學者看自得自家病痛大一則須是這般藥」

と聖賢の書を讀む皆是れを己れに體することを要する毎に此の如し宜しく深く之れを思ふ可し。

室鳩巢曰く 雜念は善惡を問はず最も讀書の間に害あり戦々兢兢として豫防す可し、讀書の時は意志を凝定して急速にす可らず又心目を明張して蹉過す可らず。

白河樂翁曰く 讀書は是れ智を廣くする第一法。

足利弘訓曰く

- 一、人を欺くために學問す可らざる事、
- 一、人と争ふために學問す可らざる事、
- 一、人を誹るために學問す可らざる事、
- 一、人の邪魔するために學問す可らざる事、
- 一、己が自慢するために學問す可らざる事、
- 一、名を賣るためにすまじき事、

一、利を賣るためにすまじき事、

學者悉く座右の銘として深く顧みる所ある可きなり。

羽倉簡堂曰く 斷して之れを爲せば鬼神も之れを避く苟くも疑ふ處ろ有らば爲さるに若かず。

藤田東湖曰く 讀書は博を貴ひ候得共ウハスベリ致し候ては何程萬巻を讀み候とて用をなし兼候古人の所謂眼光紙背に透ると申す如く讀度き事に御座候次第々々の世に生れ候程讀書多く相成り可申哉七史讀めは相濟み候か十七史と申様相成未か未に相成候は二十史も五十史も讀み申さず候ては相成らず譯合も博を貴ひ申候中にも其の要を得候よふ肝要と存候人の持前種々有之ゆゑ一概には申兼候得共歴史等も唯たバツト讀み候よりは何哉一ツ講究著述の心得にて讀候方格別に益を得候よふ相覺へ申候制度の事會機の時も文辭の事も名臣賢相の行狀其の外記憶可致と存候ては大抵の人にては中々に覺へ兼ね候東坡か漢書を讀み候法など面白く御座

候尙また御切考御尤もに御座候(書簡)
吉田松蔭曰く 人古今に通せず聖賢を師とせされは則ち鄙夫耳讀書は尙友君子の事なり。

眞木和泉曰く 學業は志才氣の三つなければ成就せずまつ士たらん者は志を高く大に立つ可し志を高大に立れば自ら才もます者なり才あれば讀書の勤めはさらなり萬事の學習思ふ様になるなり左様に勤れば知見日々に廣くなりて氣も強く精神もさはやかになる氣力強くなれば又自ら志も太くなり志太くなる儘に才もまさり才まさる儘に氣は愈々強くなりゆくなり此の三つのも相互に助けて學業は思はず知す成就す。

坂井虎山曰く 均しく是れ求むる也貨財に求むれば則ち之れを貧鄙と謂ひ詩文に求むれば則ち之れを風雅と謂ふ。

支那

孔子曰く 學びて思はされは罔し思ひて學ばされは則ち危し。
洪自誠曰く 心體光明なれば則ち暗室の中に青天あり念頭曖昧なれば白日の下に厲鬼を生ず。

薛瑄曰く 聖をなし狂をなすこれ心の一轉移のみ。

朱熹曰く 今日學はすして明日ありと謂ふことなかれ、

荀卿曰く 學は以て已む可らず青は藍より出て藍より青く氷は水これを爲して水より寒し。

孟子曰く 流水も科に盈たされは行かす道に志す者章を成さされは至らす。

荀卿曰く 聞かざるは之れを聞くに如かず之れを聞くは之れを見るに如かず。

陳繼儒曰く 天下の事利害常に相半はず全利ありて而して小害なき者唯書のみ貴賤貧

富老少を問はす書を觀る一卷なれば則ち一卷の益あり書を觀る一日なれば則ち一日の益あり。

國語に曰く 朝に業を受け晝は講讀し夕は習復し夜は過を計り憾み無くして而して後ち安きに即く。

朱熹曰く 讀書多きを貪らすして常に自家の力量をして餘り有らしめよ。

唐彪曰く 凡そ文を讀む者多きを貪れば必ず深く造らす深く造るもの必ず多きを貪らす。

莊周曰く 秋水時に至り百川河に灌く涇流の大兩涘渚崖の間牛馬を辨せず此に於て河伯欣然として喜ひ自ら以爲らく天下の美盡く己れに存せりと流れに順ふて而して東し行きて北海に至る東面して而して視れば水端を見ず是に於て河伯始めて其面目を旋らし而して歎服す。

淮南子に曰く 千金の貨を決するものは鉄錫の價を争はず。

三字經に曰く

- 一、吾か家厚産なし經史是れ良田。
 - 一、學は乃ち身の寶、儒は席上の珍の如し。
 - 一、古今の名宰相盡く是れ讀書の人。
 - 一、學者は禾稻の如く愚夫は草萊に似たり。
 - 一、草萊は人の惡む所禾稻は國の財なり。
 - 一、今古の事に通せんと欲せば須らく五車の書を讀むへし。
 - 一、窓前苦讀を勤むる者馬上錦衣にして歸る。
 - 一、朝に田舎の郎と爲り暮に天子の堂に登る。
 - 一、少より勤學多ければ盛年に至て志氣高し。
 - 一、敢て高聲に語らざるも恐らくは天上の人を驚さん。
- 蘇東坡曰く 少年學を爲す者一書毎に宜しく數次之れを讀む可し。

濟仲曰く 讀書は鈔するに如かず一に簡練を加へ一に遺忘に備へ一に書法を兼學す。

王安石曰く 貧者は書に困りて富み富者は書に困りて貴し。

唐彪曰く 心靜にあらざれば明かなる能はず性靜にあらざれば養ふ能はず。

朱氏曰く 讀書先つ上下の文意の如何を看るべく一字に泥著す可らず。

學問は自家の身上に就き切に理會する處を要す。

六經を讀み唯六經有らざるか如く唯自家の身上に就き道理を討めれば其理便ち曉り易し。

毛稱黃曰く 恒に專心志を一に致すと雖も而して苟も時に作り時に綴り初め有り

て終り 鮮れば亦成る無きなり。

朱子曰く 期限を寬著し課程を緊記し今日作り明日綴り一覽萬字一目十行と雖も終に何ぞ益を成さん。

英 國

フレール曰く 學校にて學び得たる處よりは寧ろ如何にして學ぶべきかを知ること肝要なり。

ハマートン曰く 攻修は我等自身を表明するに適す。

アスカム曰く 余は知る遊園に於ける世人の遊戯なるものは余がプラトニーに於て得る

快樂に比すれば實に影の如きものなるを嗚呼思慮なき人達は眞に快樂の何物なるを知らず。

サミニエルダニエル曰く 嗚呼恵まれし文字よ汝は過去の時代を悉く一卷の中に收

め人をして衆生と共に居らしむ汝に由りて吾人は逝きにし人と語り死せしも未だ尙滅せざる者をして吾人の會議に列席せしむ。

シヨセフホール曰く 然れば勉學の結果智識の自覺とは如何に一層愉快なるものなる

ぞ一度ひ之れを味ひし者は之れに比べて人世の凡ての他の快樂を容易に拋棄するを得るなり行け汝俗物等よ行きて我等の蒼顔と貧困と不運とを晒へよ汝等無學なるにあらざれば汝等の如く氣樂なる能はじ汝等學を求めざるにあらざれば汝等は斯くも我等を輕視せざる可し我に取りては我は汝等と榮を争はんと欲せざるのみならず我れ無學の富豪たらんよりは寧ろ猙獰なる獸類たらんと欲する事を公言するを憚らざるなり如何なる智識の世界は封せられて此筐中にあるは開函果して余は其余を失望せしむるものなるや將た亦余を慰むるものなるやを知らず此中余の到底知る能はざるもの多きを思へば余は失望せざるを得ず然れとも此の種々雑多なる事柄が却て余が知らざる可らざる事を余に教ゆるの好き援助たるを思ふて余は自から慰むるなり。

マヨンソン曰く 字書は時計の如きか其の最悪なるものにてても持たぬよりは優り其最良なるものにしてても全く精確なりと期する能はす。

チエスター、フィールド曰く 怠惰は弱き心の隠れ場愚人の休日なり。

ジョン、スターリン曰く 智識を有し氣力を有せざる人は道具の揃へる家屋に人の伴はざるが如し唯氣力のみ有し智識を有せざる人は道具の揃はざる家に人の住めるか如し。

カーライル曰く 人は己れの疑問を確定するか或は之れを拋棄し而して之れを然り若しくは否に變せざる可らず。

ロバート、バルトン曰く 凡そ戸内に於て精神を修練し之れを休養する法にして勉學程普通にして凡ての人に適用せられ且つ懦弱と鬱憂とを去るに適せるものはなし勉學の快樂の大なるや人學ぶこと多ければ多き程更らに學はんとする念熾なり生命長ければ長き程智識の神と親むこと密なり。

ウヰリヤム、ウオラー曰く 余の書齋に在りて余は確かに賢人の外誰人とも言を交へず然れ共一度戶外に出れば余は俗物と言を交へざらんと欲するも得ず余は此處に在り

て遙かにエンドルの地まで旅行することなくして凡ての時代の最も俊れたる靈と最も博識なる哲學者と最も賢き經綸家と最も偉大なる將軍とを呼起し彼等をして余の用を爲さしめ得可し。

ベッドフォード曰く かの黄金の朝の時間を借りて之れを汝の書籍の上に消費せよ。リッチャード、ベクスター曰く 人を善且智くなすものは多くの書を読む事にあらずして僅かに書を善く讀む事なり何人も凡ての事を學ぶ爲の時間を有せざれば賢き人は最も肝要なるものに彼の注意を傾く可きなり。

チャールズ、ブランド曰く 如何なる耳學問と雖も讀書の如く教化に有効なるはなしそは文字に現はれたる議論は言葉に現れたるものに比して心に消化し易く且つ能く其の眞意を通じ得可ければなり言葉は其言ひ様調子或は手眞似に依りて事物の單純を損ふの恐あり又其の發音の急激なるが爲めに聽く者に其告げられし事に就きて熟慮する爲めの充分の時間を供せず。

シヨセフ、アチソン曰く 書籍は大なる天才が人類の爲めに遺せる遺産にして代々傳へらるゝ物なり。

サミュエル、ジョンソン曰く 青年は毎日五時間づゝ書を読む可し而して斯くして多量の智識を得可し。

全體の原理は書籍より得ざる可らず談話に依りて吾人は組織立たる智識を得る能はず手に執りて容易く爐邊に持運はれ得る書は是れ凡てに比して最も良き書なり。

智識に二つの種類あり一は吾人自身に一問題を知るにあり然らざれば之れに關する説明の何處にある乎を知るにあり若し吾人或問題に就きて研究を遂げんと欲せば吾人の先づ第一に爲す可き事は何れの書か之れに就きて論説し居るやを知るにあり。

デビッド、ヒューム曰く 余は成功を以て教育の普通の順路を通過し夙とに文學に對する情熱に襲はれたり而して此情熱たるや余の生涯を支配するものとなりて余に快樂を供する大なる源泉となれり。

ゴールド、スミス曰く 余が始めて善き書を読む時に余は恰かも新しき友人を得しの思ひあり曾て一讀せし書を再讀する時は余は舊友に再會するが如くに感ずるなり。

ジョン、ムーア曰く 讀書を嗜むの最大利益は屢々吾人を悪友の仲間より遠ざくるに在り何となれば家に在りて常に必ず善き友を得能ふ人は外に出て悪しき人と共に歩み且つ止まるの要なければなり。

ジョン、エイキン曰く 嘗て地上に住せし大人賢者の靈を喚び起し彼等をして最も興味ある問題に就きて吾人と語らしむるの權能吾人に存すると假定せよ是れ吾人に取りて無量の特權にあらすや何者の快樂か之れに若かんや然るに吾人好く整頓せる書齋に於て實に此の大特權を樂しみつゝあるなり吾人はゼノフロン及びシーザーより彼等の遠征に就て聞きテモセネス及びシセロをして我が前に懸河の雄辯を揮はしめソクラテス及びプラトニーをして我が前に哲理を講ぜしめユークソッド及びニュートンより直ちに數理の解析を聞くを得るなり。

ウヰリヤム、ゴッドウイン曰く 書籍は人間に取りて最も榮譽ある總てのもの、蓄積所なり文學は其内容よりいへば人間界と動物界との間に横はる一大界線なり故に萬物は讀書を好む人の掌中にあり。

カーライル曰く 傳記は唯一の真正なる歴史なり。

チャールズ、ラム曰く 余は食事の時の外に一日の中に二十回程も神に對して感謝を述べんと思ふなり余は愉快なる散歩をなさんか爲めに家を出づる時に用ゆ可き感謝文を要し又月下の逍遙、友人との會合、難問題を解釋せし時等に用ゆ可きものを要す何故に吾人はかの精神上の快樂を吾人に供する書籍の爲めに感謝せざるや何故にミルトンを讀む時にシエクスピヤを讀む時に感謝せざる乎又スベンサーの詩を誦する前に感謝の會を開かざる乎。

トーマス、カーライル曰く 願くは神の祝福、フィニシヤ人なりレカドマス或は何人なり共書籍の上にあれかし。

復讀する毎に新しき興味を供せざる書は一讀の價値たも有せざる書なり。
 近世に於ける眞正の大學校は書籍を蒐集せし所なり。
 肺腑より出たる書は必ずや他の肺腑に達するなる可し此の目的を達せんか爲めには
 凡ての文飾凡ての著述術は言ふに足らざる細事のみ。

サミュエル、バルマー曰く 世に書籍の如きものあるなし鬻かるゝ凡てのものの中に
 比較外に廉價なるものにして凡ての快樂の中に精神に疲勞を感せしむる事の最も勤
 きものなり彼等は場所を塞くこと至りて少く使用せられざる時は沈黙を守る然れ共
 吾人一度之れを手にすれば彼等は曾て地上に住せし最も勝れたる人を其の最も勝れ
 たる時に於て吾人に紹介するなり。

ジョン、フライト曰く 余は社會か余に供し得る最も勝れたる勳章の類よりも書籍を
 以てよく満たされたる愉快なる一室を擇ぶ者なり。
 余の意見に依れば労働者の家族に與へらる可き凡ての幸福の中書籍を愛するに優れ

るの幸福はなかる可し讀書より來る家庭の感化は多くの誘惑と罪惡とより人々を救
 ふものなり。

アイザック、デスレリイ曰く 極善なる傳説は再び復た人身に合して極美なる形狀を造
 る。

シエクスピヤ曰く 愉快のあらざる所利益生せず唯汝の感動する物を擇ぶ可きのみ。
 ベーコン曰く 博學は高く飛んで囀々歌ふ外何事をも爲すなき雲雀の如きものにあら
 す寧ろ鷹の如く天に翱翔するは眞なりと雖も便宜と思ふ時は其餌食を捕へん爲めに
 急下し得る所のものなり。

ハーシェル曰く 書物は最も賢き最も愉快なる最も親愛なる最も勇剛なる又最も純粹
 潔白なる伴侶なり故に眞に書物を解するものは最も幸福の人なり。

ジョンソン曰く 捕へよオー捕へよ瞬間の時を飛び去る分秒毎に改良せよ生命は短か
 き夏にして人は花の如し彼れは死す嗚呼如何に早く彼れは死するよ。

サー、ロイル、ロツチエ曰く 時の進行は此の如きものなり即ち行動不自由なる幼見
か街道を奔走し其造主を呪詛するに至るか如し。

スマイルズ曰く 忍耐の心なくして輕躁の性あるものは何事を爲しても人に及ぶこと
能はずたとひ愚鈍の人と馳驅するもまたこれに後ることあり。

カーライル曰く 書にして若し衷心より出たる者ならば必ずや遂に他人の衷心に透徹
す可し。

ペーコン曰く 諧謔の念慮多き人は數學を研究す可く諧謔の念慮少なき人は勉め
て諧謔を習ふ可し判断の遲鈍なる人は律令を學ぶ可し蓋し人常に其短處に心を用
るざれば偏執の人となる可し。

バイロン曰く 生れながらにして知れる者はあらず名僧智識と雖も亦人より學べるな
り。

佛國

ダレムベルト曰く 余が讀書して得たる處は差少の満足と學問とのみされど皇子の風
彩を飾るの更らに困難なる技術に至ては未だ之れを知らず。

ナポレオン曰く 我は一萬の銃劍より三つの新聞紙を恐る。
ルソー曰く 凡ての大著述は一の活動なり凡ての大活動は著述なり。

ヴォルテール曰く 二十の大冊を爲すの著書は決して革命を誘起せざらん唯三十錢に
價する携帶に便なる小著述は恐る可きなり若し聖書にして一部百二十圓にも價せし
ならば基督教は決して建設せられざりしなり。

バツフォン曰く 唯大才人の著書のみを讀め其人々は甚た少しニュートン、ペーコン、
ライブニッツ、モンテスキュー及び我れ。

フランソワ、シャルボンティエー曰く 余はハインシアスの言として傳へらるる下の

辭に笑ひながらも同意せざるを得ず彼は和蘭人本來の無邪氣を以て述べて曰へる様
 余はプラートの著を読むに當りて快樂と熱心とを感ずること甚しく此の哲人の著
 書の一頁は確かに葡萄酒十杯を飲むの酔を以て余を動かすなり」と
 フェネロン曰く 書籍及び讀書の愛歡を交換するを要求するものありて諸帝國の全版
 圖の王冠を献げ來るありとも我れ悉く之れを蹴擲して一顧することたに可
 し。

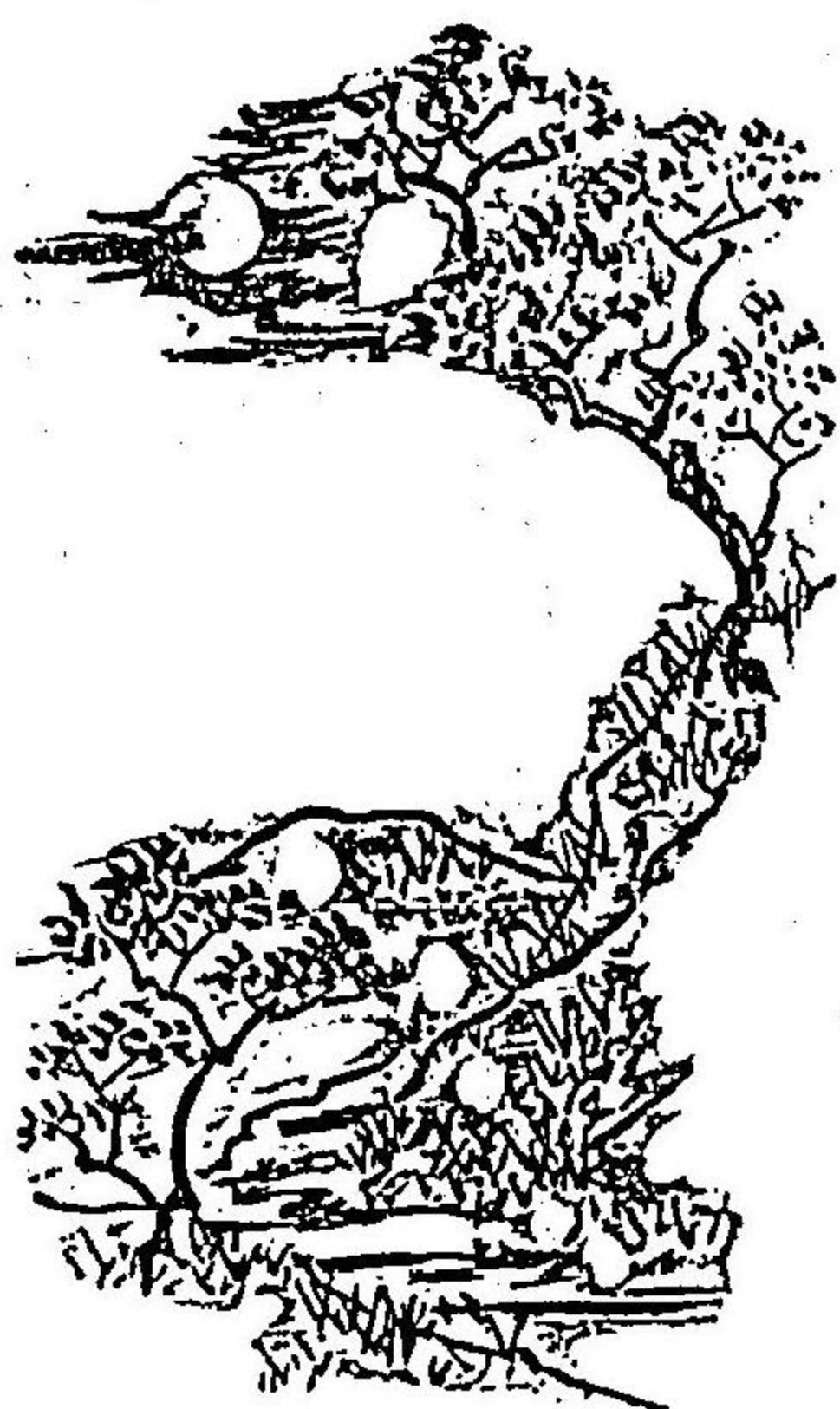
ロシニフアーコー曰く 智識の心に於けるは健康の身軀に於けるが如し。

フルーエヤ曰く 書籍若し汝の精神を鼓舞し賞き且つ勇ましき感情を以て汝を勵まさ
 は汝此事を判斷するに他の標準を求むる勿れ是れ善き書にして善き著者の手に成り
 しものなり。

ナポレオン曰く 少年よ徒消せられたる一時間は將來の不幸に機會を與ふ。

ダレム、ベルト曰く 前進せよ光明は汝に來らん。

パンフホン曰く 大才は唯大なる忍耐なり。



獨國

ゲーテ曰く 利害の感失はれたる時に記憶又失はる。
 フレデリック大王曰く 若し新聞紙に興味あらしめんとせば之れを制裁す可からず。
 フレデリック大王曰く 書は真正の福なり。
 ショッペン、ハウエル曰く 著作の十分の九は人々の腦中より一二弗の金を奪ひ去らんとするより外の目的を有せず而して著者と出版者と印刷者とは此の目的を以て協同するなり。
 エアン、パウエル、リヒテル、曰く 學者は更らに倦怠を感じることなし心の此新婚室に於ては(吾人の書齋は斯く名く可し)總ての時と總ての所とによりて集め來りし美音を藏する此の音楽室に於ては美學的并に哲學的の快樂は殆んど吾人の撰擇力を威壓するに足る。

ゲーテ曰く 此世に在りて善事を爲さんと欲する者は非難攻撃に従事す可らず吾人は毀つよりは寧ろ建設す可きなり。
 ウイテン、パツハ曰く 如何なる職業如何なる事業と雖も若し讀書せんとする志だにあらば必ずや毎日多少の讀書時間を之に従事する者に與へざるものあるなし。
 ゲーテ曰く 我等は大業を爲さん爲めに常に青年ならざる可らず。
 カリル、バーザ曰く 青年は將來に住み成人は過去に住み何人も正しく現在に住むものあらず。
 ゲーテ曰く 過失は青年の爲めに甚だ可なり唯老年迄之れを供なふ勿れ。



米 國

コルトン曰く 誤解は常に無識よりも多忙なり無識は白紙にして我等は直ちに之れに書するを得へし然れ共誤解は已に書かれたるものなり我等は先づ之れを消去せざる可らず。

エマルソン曰く 大事業は熱心なしに遂げられたることなし。

ウエンデル、ホルムス曰く 余は書籍を愛す余は其内に生れて其内に育ちたり故に余は書籍と共にある時は馬丁が馬と共にある時の如き安慰を感ず。

チャニング曰く 世間何物か書籍の効能に如く者あらんや書籍は獨を慰め憂を去り苦痛を解くものなり。

エマルソン曰く 書を読まば最も適當なる者のみを讀む可しさらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費する勿れ。

エマルソン曰く 書籍の與ふる利益は識者の識別力如何に依りて異なり深遠なる理想と感情とを有する人か之れを發見し之れを公けにするまでは永く地中に眠るものなり。

シオドア、バーカー曰く 汝を益すこと最も多き書は汝をして思考せしむること最も多き書なり平易なる讀書は學に達するに最も難き途なり然れ共大思想家の産せし大著述は是れ真と美とを以て満載されたる思想の大船なり。

チャニング曰く 心の正しき意志の強固なる人即ち眞の思想家の著はしたる好著作を選ぶべし彼等は徒らに他人の言に修飾を加へて之れを反覆する事を爲さずして自身言はんと欲する所を語り以て赤誠溢るゝ計りの人に安慰を供す然れば此種の著述は快樂を得んか爲めに走讀すへきものにあらすして確乎たる注意と眞理を愛敬するの心とを以て讀む可きものなり。

ブロンソン、アルコット曰く 好き書は好き友の如し數少なくして選擇を要するもの

なり其選擇愈々嚴にして其親交愈々深し。

フルタークの書を藏せざる書齋は完全なるものに非ず余は之を讀む時に何人も彼以前に又彼以後に傳記なるものを著はせしこと無く亦彼れ一人か傳記者の名を享くるに足るの資格を有する者たるか如くに感す。

エマルソン曰く 要點に記號を附せ記號は回想の一荷と稱す可し。

目は概言すれば望遠鏡よりも顯微鏡より利あり。

フランクリン曰く 勉強は負債を拂ふ然れ共失望は負債を増す。

エマルソン曰く 各人の心は特別の方法を有す眞人物は學校の規則に由つて得る所なり。

ヒイチヤー曰く 我等か智識と稱するものは過去に於ける凡ての智慧の餘剩にわらず其結果なり。

ウエプスター曰く 絶頂には常に空室あり。

伊國

マキアベリ曰く 夜來れば余は余の家に歸りて余の書齋に入る……余は古人の古風の殿に入り其處に彼等の慈愛に富める歡迎を受け余に適し余が余の生涯の目的として追窮する糧を以て自ら養ふ此の數時間に人生の悲惨はもはや余を惱さず余は凡ての苦悶を忘れ余は貧を恐れず何となれば余は余の身を余が今語りつゝある人に托したればなり。

ペトラーク曰く 余に友人あり彼等と共に在るは余に無限の喜樂なり彼等は齋を異にし國を異にす彼等或は朝に在りて或は戰場に於て功を立て且つ彼等の博學の故を以て高く名譽を博したり吾人彼等に接し之れに交るは容易なりそは彼等は常に余の用をなさんと欲し余は余の好むか儘或は彼等を招きて余の傍らに坐せしめ或は之より彼等を去らしむるを得ればなり彼等は決して余を煩さずして直に余か彼等に聞か

んと欲する質問に對して答ふるなり彼等の或者は余に語るに過去の出來事を以てし
或者は余に示すに自然の秘密を以てす或者は余に如何にして生活す可きかを教へ或
者は如何にして死す可きかを示す或者は其快談を以て余の煩悶を去り余の精神を樂
ましめ或者は余の心に忍耐の念を興へ余に余の慾心を抑ゆる爲めに必要なる教訓を
供し余をして身身以外に願ふ所なからしむ一言すれば彼等は余の前に凡ての學術科
學とに達するの途を開き而して余は又凡ての緊急の場合に於て彼等の給する報導に
安心して頼るを得るなり凡て是等の奉仕の報酬として彼等は單に余の弊屋の一隅に
於て彼等か靜かに息まんなか爲めに適宜の一室に於て彼等を留め置かんことを余に要
求するのみ。

希臘羅馬

ソクラテス曰く 他人の著書によりて汝自らの發達を計る爲めに汝の時を用ひよ斯
くして汝は彼等が苦心慘憺漸くにして達し得た結果を容易に收め得へし。
レオー、アルラーシウス曰く 實に若し余に讀む可きの書なからんには即ち多くの有
名なる人の著書に缺くるならんには余に取りては太陽の光りも晝も生命其物も樂
なくして苦しきものならんそは書籍の價値と其の樂しきものとに比すれば富貴も快樂も
其他世人の欲する凡てのものも寧ろ卑む可く且つ價値なきものなればなり。
シセロ曰く 汝の書籍に縫れよ而して我よく是を讀破して我がものとなし得ることに
就て失望する勿れ吾人若し此事を成し得ば富に於てはクレサスに優り全世界の高樓
及び國土を白眼視得へし。
セチカ曰く 如何に多くの書を藏するかは汝の名譽に非らず唯如何に好き書を藏する

平を以て汝の誇りとすへし。
 シセロ曰く 何人も誤らざるものなし其の誤りを固執するものは愚人なり。
 クイン、テリアン曰く 凡ての善き著書は勉強以て讀まる可きものなり而して一回終
 まて讀み畢らば更らに始より繰返す可きものなり。
 シセロ曰く 生命の存する間は其處に望あり。



各國俚諺

- 流れ深ければ濁きかたく根深ければ朽ちかたし。
- 井蛙は輿に大海を語るに足らず。
- 短綆は以て深井を汲むへからず。
- 讀むこと多しといへとも解する所なくは書籠と云ふ可し。
- 高きに登りて招けば臂長きを加ふるにあらず、而して見る者遠し、風に順ひて呼ば聲疾きを加ふるにあらず而して聽く者彰かなり。
- 死せる獅子は生ける犬に劣る。
- 眠れる狐は一羽の鶏を獲る能はず。
- 僥倖と硝子は破碎し易し。
- 鐵の熱き間に之れを打て。

- 青年は生涯の中の美はしき一瞬間なり。
- 白日間過する勿れ青春再び来らず。
- 徐々に歩む人安全に行く安全に行く者遠地に達す。
- 朝に於て一時間を失へば終日之れを追従せん爲めに忙はし。
- 一瞬時の洞視は時として一生の経験に價す。
- 汝若し鐵砧ならば忍耐せよ汝若し鐵槌ならば強く打て。
- 始めは熱し中頃は微温に終りに冷かなれ。
- ランプの光明を保たんとせば先づ油を注げ。
- 盲目の間にては一眼の者王たり。
- 間断なき滴瀝は石を穿つ。
- 人は時に隨はざる可らず時は人に追隨せず。
- 少年の遊惰者は老者の乞丐なり。

- 盲鷄も能く穀粒を發見す。
- 勉勵なる劍は常に輝く。
- 他人の爲す事を問はず自己の事を反省せよ。
- 身軀の大は精神の大なる徴標にあらず。
- 三兎を同時に追ふものは遂に一兎を獲ず。
- 言に少なく事に多ければ其目的を達すること極めて速かなり。
- 後悔は跛の使者なり歩行遅けれ共必ず来る。
- 爵々たる松柏も屢々之れを打ては遂に倒る。
- 忍耐の若木は苦味の植物なれ共生長の後には柔軟にして甘き果實を結ぶ。
- 飛ば翼發育す。
- 薔薇の摘む可きは其花時に在り鐵の鍛ふ可きは其紅熾のときにあり。
- 耕して種まかす讀んで理解せざるは半は懶惰なり。

- 遅々として行くものも亦其の目的を達す。
- 日光の輝ける間に枯草を造れ。
- 學問は年齢を問はず。
- 今日爲し得ることを明日に延すこと勿れ。
- 今日紅顔ありて明日骨となる。
- 人は命ある間は學ばざる可らず。
- 皮相の判断を爲す勿れ奇材往々弊衣の中に隠る。
- 粒々相憑りて堆を爲す。
- 細流も合すれば河となる。
- 書中花あり芳香馥郁たり。
- 錦繡を附くるも猿は元より猿なり人も亦然り。
- 盲者は咫尺を見ず而して離婁は千里の隅を燭らす。

- 非常なる名を成す者は非常なる行あり。
- 胸中三萬卷の書なければ眼中天下奇山なし。
- 玉磨かざれば器を成さず人學はざれば道を知らず。

學生讀書法 終

明治三十五年三月二十日印刷
明治三十五年三月十五日發行

學生讀書法
正價二十錢

著作
所有

著者 駿臺隱士

發行者 岩崎鐵次郎

東京市神田區鍛冶町十七番地

印刷者 戶上義章

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發兌

東京市神田區鍛冶町十七番地

大學館

岩崎徂堂君著岡落葉君畫

田中正造奇行談

正價廿五錢 郵稅四錢

肖像筆蹟入 (再版)

明治の佐倉宗五郎

誰ぞとは

鑛毒問題

に十年一日の如く狂奔盡瘁せる田中正造翁其

人なり翁が行動たる總て**熱血の餘**に墮落社會に

在では寔**模範**たるものあり本書は翁に人の**模範**か幼時より今日に到る

逸話奇行

を蒐めたるもの、寔に近時有益の書なり。

東臺隱士著 岡落葉畫

名士の交際術

正價廿五錢 郵稅四錢

本書は田中正造、佐藤鬼少將、江木衷、北垣男爵、久保田讓、高木辯護士、平岡浩太郎、大隈伯、其他**現今有名**の爵、頭山滿、其他

人士

か應接問は如何に裝飾應接せられたるか如何に

し如**談話**するか**訪問**し**實見**

したる**寫實的評論的**の筆を極めて

きたるもの、一讀**面目躍如**として

これかの名士が**面目躍如**として活現し宛然讀者自身名士と談話する感あり、

原田東風著 岡落葉畫

暗黒の青年時代

正價廿五錢 郵稅四錢

恐る可**警告**むべきは青年時代なるかな。 **悪**

魔耳に妖鬼の袖を惹く、郷關を出つ

固なるや歸郷果して幾人か錦繡を纏ふ

や、吁、暗黒なる**前途に光明**

を認め **一道の活路**を得んとする

に依 **準備せよ 警戒せよ**

(三)

押川春浪君著

岡落葉君畫

空中大飛行艇

世界奇譚 第三編

正價廿五錢 郵稅四錢

春浪君の著 **愈々出て愈々奇**

を驚かし「奇人の旅行」は膽豆の如き小人輩

武者修行」は **碧眼豚尾**の膽を挫く

「空中大飛行艇」 **世界万国**誰か驚

に至つては **新發明**をやり **輕**

空中大飛行艇の **軍艦**また必要を見

戦は正に空中大飛行艇に依る行文流暢記

岩崎徂堂君著

中江兆民奇行譚

三逸事 奇談

肖像筆蹟挿入 正價廿五錢 郵稅四錢

兆民居 **一世の奇才**なり、奇言

奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如

し、嗚呼此 **不治の病**に罹つて病

居士が **奇言奇行**を蒐め以てこ

するは聊か、著者の感する所あればな

(三)

長田偶得君著

明治六十大臣

三逸事 奇談

正價三十錢 郵稅四錢

明治十八年内閣の改革以來大臣の職に上

つた **總計六十人**者である、著

者を揮つて **大禮服**を抜き去

裸其儘の所を描く **抱腹絶**

倒

宮崎來城君著

鄭成功

正價卅五錢
郵稅四錢

鄭成功は國姓爺の名を以て從來稗史小説に作られ、演劇に仕組まれ、日本人に深く記憶せられたり、而かも未だその完全なる實傳あるを見ず

宮崎來城先生著て支那臺灣を遊歴して

珍奇斬新の材料と頗る豊富此に先生謹嚴而かも瑰麗の筆視を新にし、これ先生を揮つて鄭成功一篇を著さる、これ先生が近最も苦心の餘に成るも著中好讀本たるを期せられたり。

弟か

生田葵山人著

貴族の戀

正價參拾錢
郵稅四錢

生田氏思想豊富にして筆力青葵山氏に極めて精緻

年作家中天才の名あり

貴族の戀一篇は葵山氏か苦心慘憺の作なり、

上流社會の戀愛を

運筆極め、妙齡芳顔の一令て深刻、

嬢二個の紳士を翻弄する所の如き神は描寫心理を發いて妙殆んど

手の感あり

原田東風君著 小山榮達君畫
魔窟叢書第二編

木賃宿

正價廿五錢
郵稅四錢

社會の暗面先づ下層の生活を研究す

可し、下層の生活を探らんと最も適切にして複雑なる木賃宿を觀察するを便とす

宿の活寫はよく社會の罪惡

亂調病源を指摘して餘蘊なから

に非ず、苦心慘憺の處、唯その著者苦心慘憺の處、奇警緻密なる觀察に止まずして活寫の筆法に存

これ又 一部の好小説

原田東風君著 岡落葉君畫
魔窟叢書第二編

貧民窟

正價廿五錢
郵稅四錢

勞働問題、

社會問題、風俗宗教等に力を盡しつゝ、

第一に貧民窟の現状に精

ざる可から、空論の喧々たるに

これが状態生活を寫したるの書甚だ少し

著者これを慨し親、非常の苦心

を以て本書を作らる行文極めて趣味あり、彼の徒らに統計的記實的のものと同じの比に非ず、

木村鷹太郎君著

パイ文界の大魔王

正價四
十錢郵
税六錢

色刷寫真版數葉挿入

本書はパイ幼時より終焉に

るの生涯次を逐うて精細その性格の戀愛の

文字の思想悉く叙説し評騰し眼光

炬の如し狂熱詩人が筆勢火而貌活躍して、吾

人が面前に髣髴たらんとす寔に寂寞たる
文壇一道の活氣を興へたるものと言ふ可し

與謝野鐵幹君著

新派和歌の葉

正價廿五錢
郵税四錢

本書は鐵幹君が多年の間初學者の爲め、

親切叮嚀を旨と註釋、評

論、説話をせられた新派和

歌に關する著作を蒐録歌壇の

珍と稱す可し、

駿臺隱士著

學生坐右叢書第三編
學生讀書法

正價廿錢
郵税四錢

讀書を坊主が經と讀む様で

するに萬卷何の益もない殊に今日の様に著書が

數限りがない状態では殊に讀書の法を知

らな時間と費用に計る可ら

いと蒙るのである依て苟も忠實なる考をもつ

た學生は讀書方針を誤らぬ
法を會得して
様にせねばならぬ

東福寺管長濟門契沖禪師題
近藤嘉三君著

魔術長生法

題目靈妙不可思議と言ふ人

然る未だ道破せざる所

何人も虚誕無稽婦女子の眼を

非すか心理と基礎として説述

功果顯然たるものなり試に目次

長生の秘訣不死を摘記すれば心的療病
法等二十餘箇條
長生を冀ふの**人必讀の書なりとす**

早田玄洞君著

臨終の一日

正價廿五錢
郵税四錢

本書は臨終の際に於ける英雄豪傑君子美

人烈婦高僧碩儒等が言行を描きたるもの、平常

の覺悟は臨終の際によつて解決せ

るものなり、本書を讀む

の豁然大悟すべきは疑ふ可きに

非ず一部の小傳と見

做すも可なり、蓋し精神修養上必須の

宮崎來城君著

名流叢談

第一編 苦學談

正價二十錢
郵税四錢

苦學十年 始めて一家を成す可し

古人今人世に名聲を博

し天下に榮譽を得るもの孰れか苦學の結

果ならざらんや

來城健筆富想天下悉く敬服する

氏が苦心の餘に成り青年と益計する可

からざらんとす

早田玄洞君著岡落葉君畫

膽力修行

正價廿五錢
郵税四錢

語に心は小可し、膽は大なる

可しと、膽力を優劣劣敗に於て

養成せずんば、妖怪を探

其名を揚げ其果を收むる

能はず本書は著者或は

險山を攀幽靈を觀破小説

的の經歷談を極めて、有興味

たる、一讀二嘆蓋し卷を掩ふ

現代青年の憲法

正價廿錢
郵税四錢

如何に成效す可き乎これ満

せは青年が日夜焦慮する問題なりとすこれ

が秘訣を知らんと極めて空漠擾む所なく

半途學を廢するの悲運に了るは何ぞやこ

れを要する精神を措形式を學べ

に彼等は此等の弊を極めて青年

の福音たるを得可き乎輯むる所嘉

文彦、島田三郎、横井時雄、三宅雪嶺、

井上哲次郎、大隈重信、志賀重昂、加藤弘

之、陸青年教育の熱心なる人々

寫眞版
數葉挿入

宮崎來城君著

乞食旅行

正價廿五錢
郵稅四錢

腹に萬巻の書を貯へな
がら旅行のしたさに
缺碗と片手の仲
に乞食の仲間
間入して彼處
と經廻り實歴談
くつた實歴談
ぬ三日した止められ
いふ乞食の境
遇はどんなもの
來城氏が無錢旅行を讀
はん人の趣味の
多しことを知て居
て本館が喋々せざと
も一讀んでみたい
うとい氣になるであら

矢野滄浪君著

食客

正價廿錢
郵稅四錢

寫眞版
數葉挿入

胸間燦爛たる勳章を掲
げ馳馬に鞭ちて臺閣に
上る幾多英傑
の前身を究むれば
一貧生に過
ぎざりしなり、奴婢と
居を同ふして薪水の勞
に服し食客なりし
唯そ堅忍不拔
れ勉力行よくその成効
を致したる所以なりと
著者が實踐を以て
著者が實踐を以て
閱歴を多し趣味
てす願の滑稽あり
讀解願の滑稽あり
腕を扼の憤慨あり
腕を扼の憤慨あり
す打て呼ぶの快事あり

(再版)

巖谷澗山人序◎生田葵山人著

少年英雄

正價五錢
郵稅四錢

寫眞版
數葉挿入

生田葵山人が獨特
の麗筆を有する
文壇の公評た
り本書は山人が苦心
經營の著作數篇を
蒐録したるものにして篇
中の主人は無邪氣に
公が或は無邪氣に
てに勇氣ある天真
にし快活なる所如何
を心酔せしむるや否や試
て一誦し好伴侶たる
を知り玉へ

東京神田鍛冶町
十七番地

大學館

(十二)

巖谷澗山人序◎生田葵山人著

少年進擊隊

正價五錢
郵稅四錢

寫眞版
數葉挿入

葵山少英雄として著
人滿天下の少年
年進擊隊を讀むの少年
必ず快哉三呼びてし
や大に爲すあらずんば已ま
ざるべし、漸
く舊習の弊
國の少年日出
爽とせしめんとす然れば
即ち本書の功は管に一讀
消閑の具たるに留らず、
またた補ふに足るものある
なり

東京神田鍛冶町
十七番地

大學館

(十三)

編九第話叢傑豪

著君城來崎宮

傑豪の情多續

正價廿五錢
郵稅四錢

瑰奇にして而かも優艶な
る筆致に富める宮崎來城
君に多情の豪傑
一篇に出た世の讀
して大に驚かす
の聲に促されて更には湖
洩れに促かされて更には湖
たる戦國の猛將
勇士の情事を寫
戟と紅粉、甲
冑と彩衣、如何に
の人をして恍惚たらしむ
よ、爛眼と柳眉、
廣額と花顏、
に其の光景の人をして
た恍惚たらしむるよ、
轉

著君浪春川押

談奇人怪

正價廿五錢
郵稅四錢

表題に人心を驚倒
すに本書の記事推量する
に足らん、我れか我れに
非す彼か疑團百
彼に非す、疑團百
出、煩悶痛苦已にして、
なり、春風一ひ来りて堅
氷融くるの感ありこれ一
篇の骨子の梗概なり、其
他の奇俠士、戰
場の花、如何に讀者を
ふるむるぞ加、圓熟の
筆、たれば、婦女
童幼、亦その趣味を解
するに難からず
東京神田區鍛冶町
十七番地
大學館

(十四)

著君堂徂崎岩

弟兄の士名

正價廿五錢
郵稅四錢

近刊

一世に快事多し、然
第一腹一生の兄
が極めて相競ひ共
極める名を博して
々たる名を博して
稱せらるるの快事
ふも無けの快事は
ん本書は、現今社
會に活動せる
人物の兄弟が逸話
の記を描きたるも
しに、立志の興
奮劑たる事疑ふ可
家庭必須の書
なりといふ可し
東京神田鍛冶町
十七番地
大學館

著君山靄藤須

人夫の家名士名

正價廿五錢
郵稅四錢

近刊

區々たる一婦人、纖弱な
る女子、遂に天下無用の長
物たる乎、事に表裏あり、
陽あり、國の盛
衰、家の興亡
は由來、巾幗の
觀し來れ、侮る可からざ
勢、力、稱名
名士の譽、嗚呼豈亦
家の功に歸す可けんや暴
子の功に歸さんとしてこ
風松柏を倒さんとしてこ
れを支ふるもの何ぞ松柏
に其身を託する葛蘿なら
ず、然、婦人の功
なり、亦冥々に附す可からざる
東京神田鍛冶町
十七番地
大學館

(十五)

早田玄洞君著

李鴻章

正價廿錢
郵稅四錢

世界近三大家傑は唯ぞ即ち英の
 代のヒスマ李鴻章は日彼れ、
 獨の清の李鴻章は日彼れ、
 然として逝く、我猶彼れか
 名を知る而して彼に關する著作なし嗚呼
 これ偉人を待つ道ならんや本書は實に
 が彼れ貧賤より起る現在の位
 置に達したる迄逸話奇聞を漏
 以て一は立身出世の好材料とすべく一部
 の東洋史とし日清戦争
 團匪事件一讀せざるの國民豈に

第一宮本武藏

巖谷連山人序
 黒田湖山人編
 日本武將お伽噺
 小島冲舟密畫
 色刷菊版美本

第二山中鹿之助

東京神田區鍛冶町大學館發行

豪傑叢談

洋裝 美本 全部拾冊 正假金拾五 册拾部全 四郵拾册正 錢稅錢貳一

第一編 宮崎來城君著 多情の豪傑

第二編 宮崎來城君著 臨終の豪傑

第三編 宮崎來城君著 少時の豪傑

第四編 岩井松風軒著 遺訓の豪傑

第五編 宮崎來城君著 雅量の豪傑

目次左の如し
 ○源頼朝○源義經○平重衡○木曾義仲○曾我祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴田勝家○平維盛○豊臣秀吉
 豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終を描く一讀儒夫も起つ可く鬼神も泣くべし
 蛇は三寸にして人を呑むの概あり、豪傑の豪傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこれを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の言語舉止に徴せよ
 創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ背反するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝夕の鑑とすべし
 諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數以外に一種の天真潤達なる襟度を以て人を迎へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

豪傑叢談

洋裝
美本

全部拾冊

正價拾五錢
郵稅貳錢

第六編 西山筑濱君著
豪傑の交際

第七編 岩井松風軒著
豪傑の信仰

第八編 西山筑濱君著
豪傑の修養

第九編 宮崎來城君著
續多情の豪傑

第十編 西山筑濱君著
豪傑と奥方

(十八)

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に遅るゝは自然の數なり、異色異種の人物交々來り接す此間に處して如何に談話し如何に待遇すへきや豪傑が苦心また甚だしきものあり此書これを説いて些の餘蘊を見ず

英雄豪傑の壯業偉蹟は實に渠れが信仰の產物なり、神か、佛か、人か物か、道か、理か物か渠等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成したるものなり本書詳に之を謂ふ

大事業の下には大なる準備あり偉人の素には大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑かその素養に力むるに困苦勉勵せしかを見よ

曩に、多情の豪傑一編を著して滿天下の耳目を驚倒したる著者更に其洩れたる戰國の勇將猛士が情事を寫す瑰奇優麗の筆致は説くを用ゐず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ

豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあればなり、此書或は叙説し或は評論し俊髦と佳人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり

文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著

楊貴妃

第五版 正價廿三錢 郵稅四錢

帝國大學教授内藤耻叟先生序

靜御前

第四版 正價參拾錢 郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序 岩井松風軒君著

小野小町

參版 正價廿五錢 郵稅四錢

松村介石君序 光井深君著

學生自活法

附錄 東京諸學校案内 同人學試驗問題

再 正價拾五錢 郵稅四錢

文學士梶川鳥城君序 林稻洲君著

理想の良人

正價十七錢 郵稅二錢

著者風に漢文學に精通し清國に歴遊して人間未見の書に渉獵すること多年其瑰奇無雙の筆を以て天下無雙の國色を描く材料嶄新にして艶麗の逸話蒐録して漏すなし一讀するもの身は二千年前に生れ面前貴妃か美觀に接し媚言を耳にするの感あらん

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書を珍本とせり其最期に至る迄なるが健康に依りて靜御前か幼時より其義經との關係の如きは最も詳細を極むる坊間散漫杜撰の詳傳とは同一の談に在らざるなり

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は正隆豐富文章は流麗暢達、從來不可思議の裡に疑感を決せられたり

都下何十萬の學生の中能く其素志を貫くもの幾人かある多きは惡魔の爲めに病斃の爲めに半途にして郷里に歸るもの失敗するもの種々接ぐにあらずやこれ其罪たる都下の事情に暗きが故なり獨立獨歩の男をなきか故なり光井深君此を憂ひて此書あり出京の學生を導く事親切丁寧寔にこれ學海の細針盤たりと言ふべし

此書は未婚の男女兒を持てて父母兄弟の一讀を要す、未だ妻を迎へざる男子の爲めに未だ嫁せざる女子の爲めに親切なる勸告と撰擧法を説く此書を讀みたるものは妻を離別するの不幸なく離縁せざる悲哀に際會せざるべし要するの不幸なく離縁せざる悲哀に無双の教訓書なり既婚の婦人に向て絶好の座銘なり

(十九)

涵養社編纂

中學新式勉學要訣

正價廿五錢
郵稅四錢

學を務むるに法あり法を誤れば貴重なる時間と莫大なる金銀とを散りて得る所零のみ本書は此の弊害を矯めて偏に青年が勉學の指南たらんを務められたる中學生には宜しき參考書たるを得べし

西山筑濱君著

戰國時代少年武者

正價廿五錢
郵稅四錢

少年武者が活動は果して如何筑濱君の筆これを描いて面目躍如せんとす腥風血雨の巷その緋威の如何に愛らしきよ、月光花影の下その小姓姿の如何に

岩崎徂堂君著

名士の兄弟

正價廿五錢
郵稅四錢

世の中に愉快なる事少なかられど其中にも一つ腹かちに通つた兄弟が漸々と成長して共に青雲の地位に昇つた程愉快な事はあるまいこの書は現今有名な人に違が兄弟の傳記を面白く描いたもので讀む人の爲めには大に立志の興奮劑となるであらふ

須藤靄山君著

名士名家の夫人

正價廿五錢
郵稅四錢

古今東西名を挙げ産を興すの人士はそが夫人の内助はるに依るもの多し、世に關するもの無かる可けんや本書は久し、獨り夫人に關するもの無かる面白く且つ有益なり、平易にして項目頗る饒多讀んで面白く且

押川春浪君譯著

寫眞版數葉入

世界怪奇談 第二編 世界武者修行

正價廿五錢
郵稅四錢

如意棒を提けて天下を横行する快男兒が驚天動地の活動は如何、碧眼驚き豚尾仰天す壯快痛絶

平野紫陽君著

文學奇瑞談

正價廿五錢
郵稅四錢

天地を動かす、鬼神を泣かしむ和歌の功大なる哉武士夫婦の情を和ぐる俳諧の徳偉なる哉和歌俳諧の功徳は更に言はれず文章詩歌が神佛を感應する功徳眞々奇蹟不思議の逸話を蒐録せるもの消閑の具には無比の好著にして又得易からざる參考書なり

巖谷漣山人序

生田葵山人著

少年小説 進撃隊

寫眞版挿入
正價廿五錢
郵稅四錢

生田葵山人が「少英雄」を綴きたるものは必ずやこの「進撃隊」を讀まざるを得ざるべし、少年の血氣向ふ所鬼神を泣かしめ、山嶽を撼動す好箇の少年山人の挿畫に依りて活動し破天荒の事業を演じんとす、挿畫鮮麗亦以て机上の珍とするに足る

宮崎來城君著

岡落葉君筆寫眞版數葉入

無錢旅行

著者寫眞版
正價廿五錢
郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉する中に在り風を餐ひ露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘られぬ趣味の存するものあり、此書に於ては忽ち數千部を賣り盡せり以て如何に壯快なる讀物なるかを知れ

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

乞食旅行

正價廿五錢
郵税四錢

腹に高巻の書を貯へながら旅行のしたさに、枕を片手に、乞食の仲間に入らして、彼處此處と、経つた。片どその趣味の多い事を、悟るてあらう。

矢野滄浪君著 寫真版挿入

無錢旅行 食客

正價廿錢
郵税四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれ、活るものにして、食客が辛酸の境遇不平憤懣の生るに、近時片々たる身、その中に在るの感、起さしむるし、のみならず、其學の書生に、感樂を興ふること甚だ多

巖谷澗山人著 生田葵山人著

少年小説 少英雄

寫真版數葉挿入
正價廿五錢
郵税四錢

生田葵山人が少年小説に獨得の筆を有するは、既に文壇の公評たり、此書は、田園生活、數ヶ月間に於ける、苦心經營の作、篇を蒐めたるものにして、その無邪氣にして、勇氣ある、諸君が、敬慕して、所なるか、試に誦し、主人の如何なる少年、諸君が、敬慕して、所なるか、試に誦

原田東風庵著 小山榮達君著

木賃宿

正價廿五錢
郵税四錢

社會下層の狀態を描いて、精細、苟くも貧民問題、労働問題に關して、盡瘁するの士は、一讀せざる可からざるの書なり、社會の暗面を論は、入る詩人は、最も適切なる參考書なり。

6/35

長田偶得君著 岡落葉君畫 三版

逸事奇談 明治六十大臣

正價廿五錢
郵税四錢

明治十八年内閣制度改革以來、今日に到る迄の大、臣六、十人の逸事奇談を描きたるもの、大禮服きて威儀嚴然、現れる可し。

岩崎徂堂君著 岡落葉君畫 三版

中江兆民奇行譚

正價廿五錢
郵税四錢

明治の奇男兒、中江兆民居士が、奇言奇行を描きたるもの、滑稽あり、嘲罵あり、諷刺あり、狂態あり、一讀巻を捨つるに及びず。

押川春浪君著 岡落葉君畫

世界怪奇談 奇人の旅行 第一編

正價廿五錢
郵税四錢

世界怪奇譚の第一編として、著書の尤も苦心する所、冒險思想を發ひ、旅行の趣味を解し、世界的知識を得るに、尤も趣味多くして、有益なる書なり。

押川春浪君著 岡落葉君畫

怪人奇談

正價廿五錢
郵税四錢

表題已に人目を驚かすより見ても、如何に記事の奇怪なるを、推想するに足らん、人外狂、奇狂士、暇擲の花、各々詩趣ありて、讀者をして飽く事を知らしめず。

緒方流水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

正價廿五錢
郵稅四錢
新體詩の性質を明にし、其作法を詳説じ、附する語之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類にを蒐集したるもの、新體詩自修の指南車は本書を指して何れにか之を求めん

石橋玄潮君編

韻花天月地

正價廿五錢
郵稅四錢
本書收むる所は當時有名の新體詩人の作にして其華を抜き其綺を選ひて之を集む、其數七十有餘題當に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

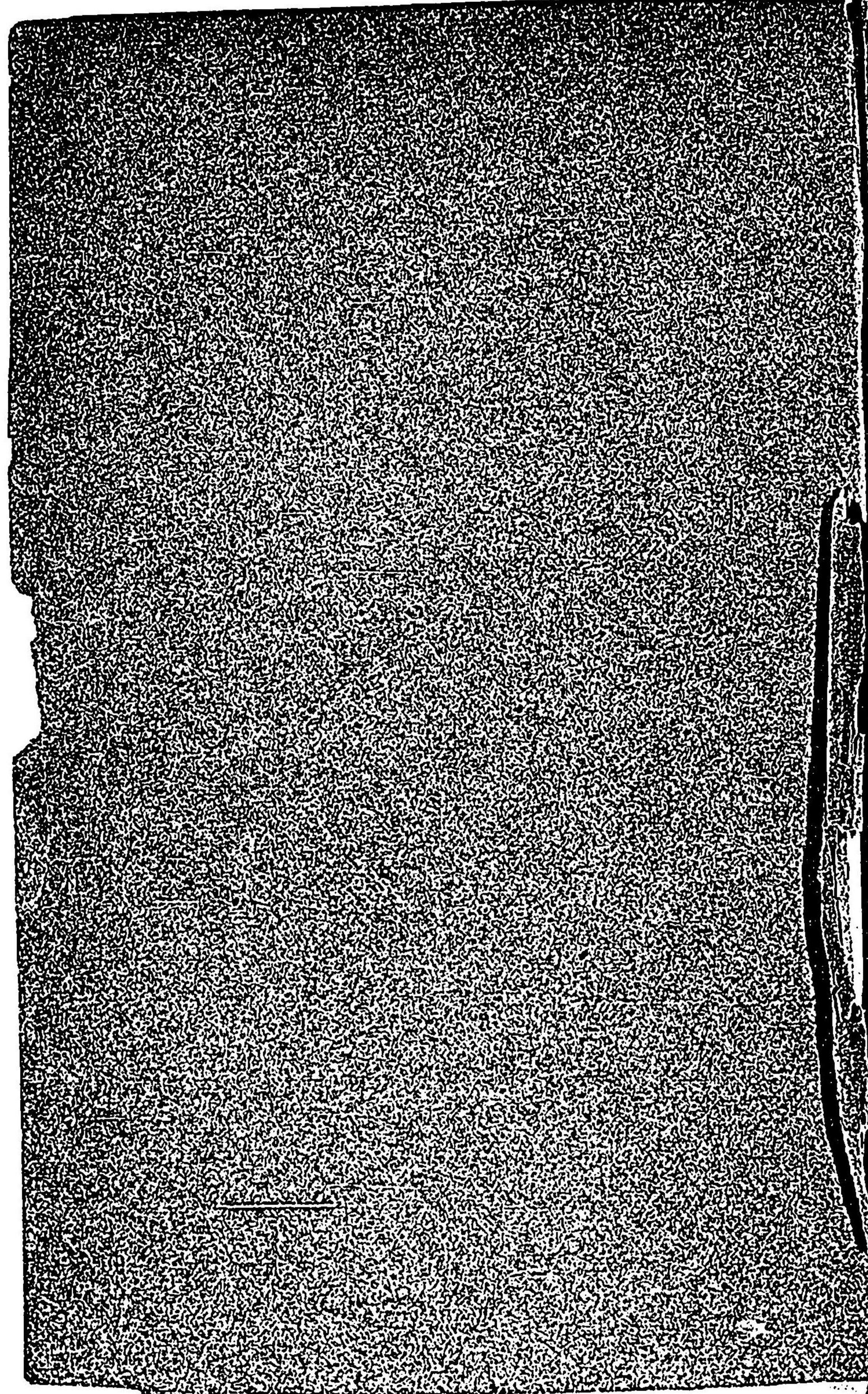
美文美辭麗句

再正價廿錢
郵稅四錢
本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり蓋し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信す

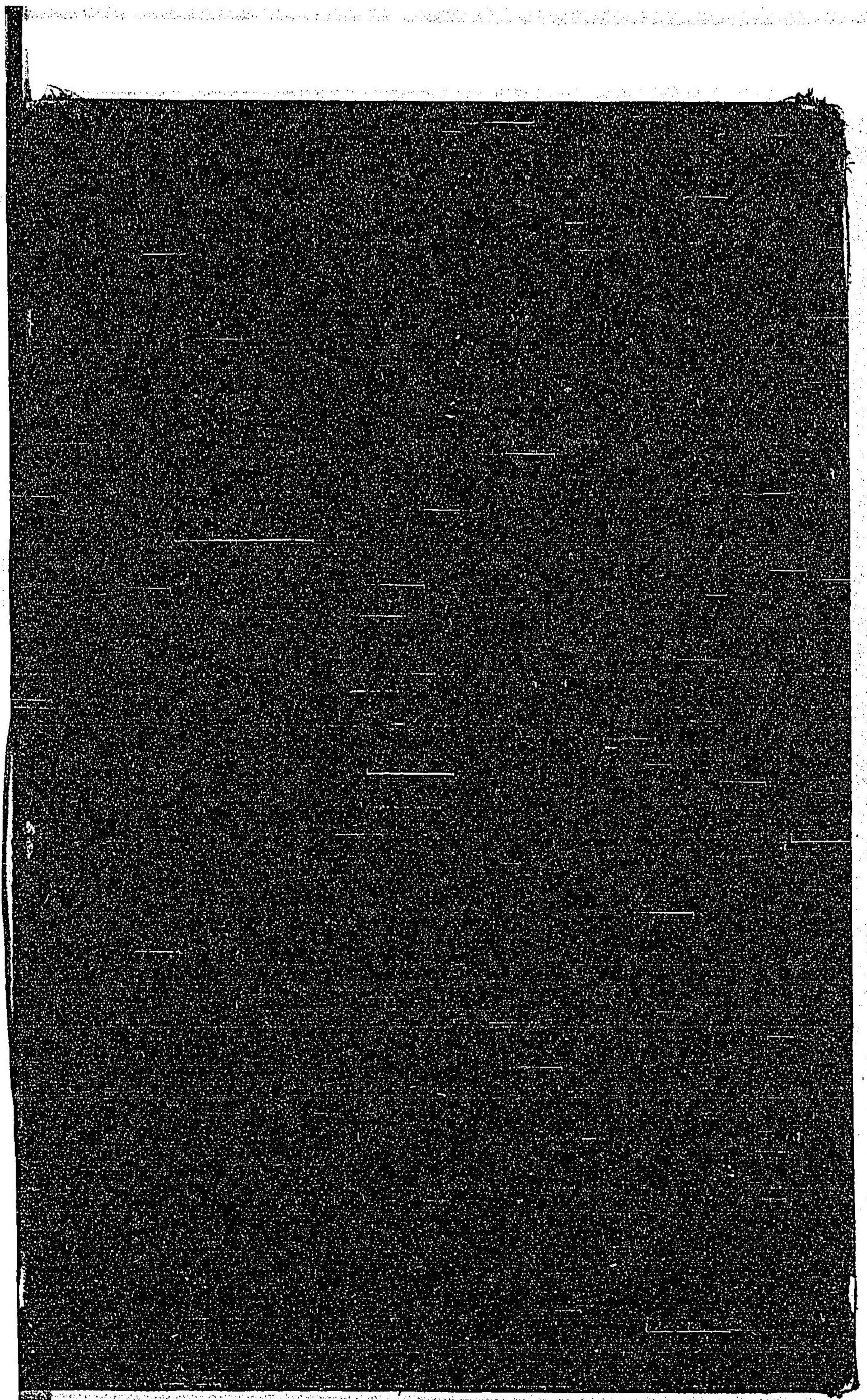
國府犀東君序 香川怪庵君述

文士政客風聞錄

正價拾五錢
郵稅貳錢
方今其名噴々たる政治家、文豪が奇談珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、風流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す、



259
5
11



259.5
11

M

101462-000-7

259.5-11

学生読書法

駿台隠士 / 著

M35

EAA-0005



